

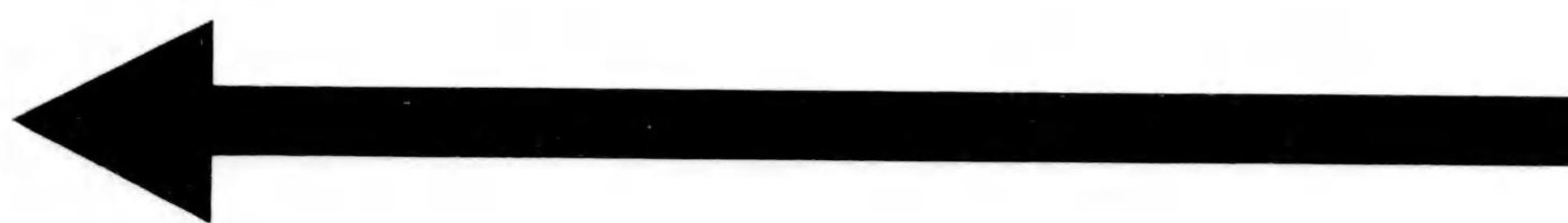
小
說
娘

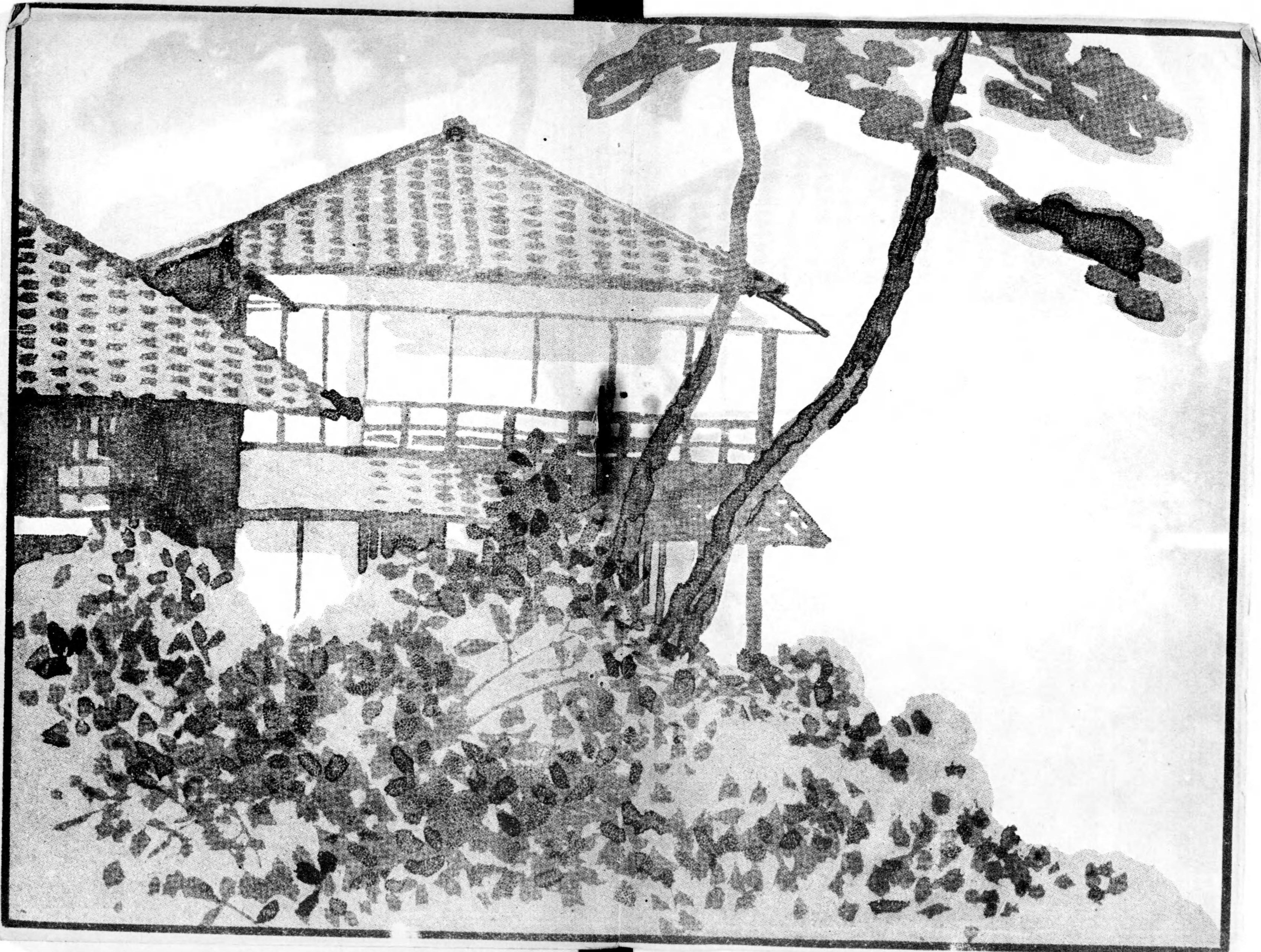
黑
法
師
作



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 ¹⁹/₇₀ m 1 2 3 4 5

始





特 102
295



黑
法
師
著

大正 東洋堂藏版
2. 10. 10
丙 亥





小家庭娘

一涙の物語

黒法師

「箱根權現に參詣したまでは大出來さ、夫から後が無鐵砲なもんです、苟くも旅行家を以て任ずる山崎君が、不用意千萬にも一枚の地圖すら持たない、蘆の湯へは僅々一里餘と聞くから眼を瞑つてゐても知れるとあつて、勝手に方角を決たものだ、半途程は無難だつたがね、兎角する内轍の痕が無くなる、道が段々狭くなる、五尺が四尺、三尺、二尺と瘦せて、終ひには熊笹の中へ消えて了つた、甚麼です、旅行家の當推量ほど危険なものはありませんまい、泣いても喚いても追付ずさ、到頭意を決し

て突破した結果が、荆棘を分け巖石を攀上つて、漸く姥子へ迷ひ込みました、はははは」と手を拍つて笑ふ。

「その代り田澤君御夫婦の款待に會うて、斯うして酒が飲るから好いちやないか」唇まで運んだ盃を宙に浮せて、自稱旅行家が笑ひながら辯解した。箱根七湯の中、木賀から地獄谷の難を越えて、辛うじて達し得べき姥子の温泉は、近く蘆の湖に紺碧の水を湛へて、彌生も三月の末つ方、櫻に早い桃の頃を、颯と時雨して暮かゝる。

「でも能く出られたことね、心細かつたでせう」と同情ある眼を輝かせて、若い田澤夫人は華やかに微笑むだ。

「學校でも蠻勇派の頭領株だつたから、ナニ迷兒になつたところで驚く連中ぢやないよ」と田澤學士も釣込まれて笑つた。

この日黎明に湯本の宿を出て、舊東海道筋を上る暢氣な書生が二人、寒いを承知

の箱根の山道を、脊廣に半靴、二重外套に柎下駄、何れも拳大の洋杖を肩に擔いで喘ぎ、元と箱根の帳場まで来ると、足は棒なり、腹は北山なり、再び温泉が戀しくなつたので、急に十國峠探検の計畫を變へた、蘆の湯、木賀、底倉、宮の下を廻つて、元の湯本に歸る巡禮の道すがら、最初に拜むだ權現の神明赫炳ならで、さてこそ山中を迂路々々したが、自稱旅行家を山崎久彌となす、竹馬の友の篠原一次と俱に、これでも有望な帝大卒業生。

恰も宿に着いて浴衣と着替へて、廊下傳ひに湯殿へ行く途中、偶然田澤法學士に出會つた、奇遇と謂はんよりは盲龜に浮木だ、のみならず新細君を帶同して、大いに女中共を羨ませてゐるといふ、何條聞捨に及ぶ可き。

「牛飲馬食は我々の本能です、夫人一つ手並のほごを看下さい」と先づ相手の度膽を抜いて、飲むわ、喰ふわ、遠慮がない。

「大いに飲つてくれ給へ、お蔭で面白く今夜は飲める……」

「妾、お酌が下手ですから、何うぞ御随意に……」と銚子を押す。
細面なれども、色の白い黒目勝ちの瞳に愛嬌を含むで、新細君眞喜子は嬉しうに見えた。

山崎久彌盃を干すと「夫人、如何です？」

「妾、御酒は些とも頂けませんから！」

「一つ位好いでせう、婚禮の時には三つ飲んだ筈だが、は、は、は」と肩を揺る、その肩をボンと叩きながら、

「おい、此方へ廻せ！それを」

「ちや、田澤君に失禮しやう」

「今夜は此宿へお泊りかね」

「左様さ！」と篠原を顧みて「何うする、夜中地獄谷の難所を冒して、木賀の龜屋まで押出さうか？」

「もう御免だ」と慌て、手を振る「白晝でさへ迷兒になり掛たぢやないか、況んや夜中地獄谷の危険に臨む……いや途方もない事だ」

「明日になさいよ、酔うて往らしつては浮雲いから！」と眞喜子が止た。

陶然として背後に手を突た田澤は、灰色に暮て行く空を眺めて「眞喜さん、もうそろ／＼歸京ても好いね」

「え、」と莞爾して頷く。

「明日赤井が来て用件が済んだら、湯本泊りの豫定で歸らうぢやないか」

「もう姥子も飽ましたから！」華かな顔を山崎に向けて「丁度一週間になるのですもの！實際山の中は退屈ですわ」

「然うでせうとも！」がつくりした山崎は更に笑懸けて「併し……郎君あり、琴瑟相和す、又樂しからずやの寸法だから！」

「厭ですよ」と眞喜子も笑つて、仇氣なく眼の縁を赤くした。

その二

盛夏三伏を繁昌の極點として、小鹿啼く紅葉の散る頃から、湯宿はげつそり淋しくなる、双子の嶺に雪解を看るまで、越年を兼た湯治客すら尠いので、況んや地獄谷の嶮を越えた、地理上最劣等の箇所にある姥子は、殆んど三ヶ月を寢て暮らす冬籠り、湖畔に山櫻の風情がなくて、容易に客が集まらぬ。

その雪解した双子山の中腹に、今日は朝から陰鬱な雲が降りた、濕つぽい空気を蒸返すやうな湯の匂ひが、重くなつた頭を一層押へつける、湯上りの温かい肌を襦袢に包むで、田澤は寢返りながら茶を飲んでゐる。

色は淺黒いが眼鼻立の引締つた、濃い眉の間に潑刺たる英氣の溢れた、如何にも活々した男盛りだが、苦學したためか、神経質の業か、年齢よりは二つ三つ老けて見える。

「まア、お行儀の悪い」と真喜子は笑つて、お化粧の濟んだ顔を覗くやうに寄せた、赤い手柄に水々した丸鬚は、若い女房の華かとも思はれて、つい微笑ますにはゐられなかつた。

小指の先で鳥渡頬を突て「お早う！」

「厭だ、人が笑ひますから！」慌て、飛退くその手を握つて「誰が笑ふものか、夫婦ぢやないか」

「でも……お止し遊ばせ、山崎さんでも見えますと悪いから」

廊下を踏む足音が聞える、急に手を離して座を立つと、襖を明けて黒い顔が浮いた。

「このお方がお越でございました」

女中の手から受取つた名刺を、真喜子が田澤に取次で「赤井さんでせう」
「む、赤井だ、大層早く来た者だね」

「此方へ御案内しますの」

「否、此室ぢや何だから……二階に明いた部屋があるだらう、姐さん、叮嚀にお通し申して呉れ」

「畏りました」

再び摺寄つた真喜子は低聲になつて「貴夫、厭ですよ、赤井さんに御酒なんぞ御馳走なすつては……」

「何故ね、態々遠いところを尋ねて来たのだから、酒位飲まさんと氣の毒だよ」

「でもね！」躊躇しながら、御酒を召ると彼の方は煩いから……」

田澤は笑つて答へなかつた、纏て襦袢のまゝで二階へ上つた。

少時すると、

「お早う！」と聲をかけて、今起床た許りの眼を擦りながら、山崎がのつそり入つて来る。

「昨晚は失禮！田澤君は」

「お早うございます」軽く會釋をして「お客様が見えましたから」

「へえ、姥子へ來客とは珍らしい、誰です」

「横濱の赤井さんがお越になりましたね、今二階へ上つた許りですわ」

「赤井！」鳥渡小首を傾け「あ、彼奴ですか」

「貴君！」

「おつと、大きな聲をするぢやなかつた」

首を縮めて頭掻きく「厭な奴が來たんですね、夫人」

「直ぐ歸つて呉れると好いのですけれど、事に依ると御酒になるかも知れません」

と真喜子は眉を寄せて言つた。

續いて篠原が又のつそり「や、お早う、昨夜は全然酩酊しました、田澤君は風呂ですか」

「例の赤井が来てゐるとさ」と山崎が忌々しうな顔をする。
 「フン」と鼻の先で笑ひながら「猶太人奴、何か又田澤君を胡麻化しに來たのだから、夫人注意せんと可かんですよ、敢て他人の蔭口を利くぢやないが、彼奴だけは甚麼あつても褒る譯にゆかん、實に下劣極る男だ」
 二階にゐる赤井を下で憤慨して、二人はさつさと田澤の部屋を出て行く。灰色の空は稍險しくなつて、間もなく大粒の雨が降つて來た。
 「これぢや終日歸られないかも知れないわ」
 眞喜子は押出すやうな太息を吐いた。

その三

「や、御苦勞でした、多分正午頃だらうと思つてゐたのに、案外早かつたですね」
 人馴こい眼を赤井に注いで、莞爾しながら間近く坐る、と火鉢を抱へてゐた赤井

は急に飛退いて、二三度續けさまに叩頭した。
 「昨晚木賀まで参りましたが、へえ、御承知の地獄谷でな、一つ間違へば溶て了ひますから危ふきに近寄すとあつて、今朝早々にお伺ひ致しました、ところで夫人にもお變りなく」
 「難有う、妻も至つて壯健です、何うせ後でお目にはかゝるが……、一風呂浴りませんか」
 「や！」と肩をすばめて恐縮しつゝ、「此宿の温泉も又格別でござります、貴君、もうお召になりましたか」
 「浴つてお來なさい、その内に支度も出來ますよ」
 「田澤さん、何もな、他人行儀にお構立は要りませぬ、用件さへ濟めば直に失禮しますです」

彼是五十を越えた小柄の男だが、頭も輕ければ至つて腰も低い、銘仙の袷羽織、

擬細の綿入博多の角帯をキチンと締た、何處から見ても領る、商人風。
宿の浴衣と替て、鞆と衣類を隅の方に重ねて、

「折角でございますから、へえ、鳥渡失禮致します」

「緩々入つて来なさい、此宿の湯は永く温まる程好いさうだから」

「はい、はい」と小腰を屈めて又叩頭すると、いそ／＼湯殿へ降て往つた。

その後姿を廊下でちらと見て、真喜子が急いで上つて来た。

「貴郎、雨ですわ」

「到頭降出したね、是ぢやもう一日逗留せにやなるまいよ」

熟と所夫の顔を見ながら「赤井さんも逗留するんでせうか」

「さア」と謂つたが田澤にも、これは判らない。

「構はんぢやないか、赤井一人が逗留したところで、さほど費用の嵩むぢやなし、

一人でも多い方が賑かで好い」

「外の方なら何ですけれども……」真喜子は厭な顔をして「妾、彼の方は何うしても好かないわ」

「馬鹿な事を言ふものぢやない、勿論大勢の知己の中には、好た者もあり嫌ひな者もある、それを一々咎立てゝゐた日には、營業も交際も一切能ん譯だ、いや、汝を叱るのぢやないが、その邊は能く考へてゐて貰はんと困る」

「けれどね、何だか厭な人ですから」

「馬鹿な！」と眼で笑つて「那麽事を言うてゐる隙に、御馳走の注文でもして置かないか、山崎にも篠原にも何か振舞つて遣るが好い」

力のない顔をして真喜子が出て往くと、湯上りの額をてらく／＼させながら、程なく赤井が室に歸つた。

浴衣の上から羽織を引かけて、

「や、失禮致しました、結構なお湯でござります」

「降出したやうですね」

「さア！」と伸上つて空を眺め「是非今夜の汽車に乗りたいと思ひますが……これちや容易霽さうもございません」

「一日逗留しなさい、明日は私達も歸る意ですから」

その後が愚にもつかぬ世間話になる、去年の海外貿易が順調であつたとか、今年は支那方面に棉花が多からうとか、紡績株が好況を現はして、社債募集の金が頻出する事など、取止のない噂をしてゐると、聽て注文の酒肴を運んで来た。

お酌に坐る女中を引下らせて、扱飲ながら徐ろに話を向ける。

「時に會社の方は甚麽景況ですか、もう餘程見込が立ましたか？」恚う言つて熟と赤井を見た田澤は、些か不安らしく眼を輝かせた。

一口飲んで薄い唇を拭くと、赤井は軽く咳してニツと笑ふ。

その四

「日本銀行は勿論の事、御覽なさい、何の銀行も皆利を下たちやございせんか、遊金が多いから利が下る、世間にも大分金が遊んでゐます、さア、茲を一つ狙ひましてな、是非とも盛上げて了はんといふと、斯ういふ機會は滅多に來ませぬちや、田澤さん、へへへ、運が向ましたせ」

嘗るやうにして盃を干した赤井は、その盃を田澤に返して、つるりと一つ額を撫でた。

「大山さんも大層な意氣込でな、この六月までには必ず成立して見せる、立派に拂込をさせると仰しやつて、はい、この頃ではずつと事務所詰切でございます」

「大山君は精方家だから、勿論有らん限りの力を盡してゐるでせう、六月といふと後三月餘だが、株主の景況は甚麽工合です？」

「有望ですとも！」と強く頷き「高が貴君、六圓二十五錢の拂込みですから、十株で六十二圓五十錢、百株持ったところで、七百圓に足らん、愈々株を市場に出すとすれば、半額拂込みだけの値段は大丈夫です、事業が事業だから豫想外の好況で、既に豫約が三千株に達しました、何うです田澤さん、素晴らしいもんぢやありませんか」

吉報は待つ人の耳に嬉しく響く、況んや依頼した人の努力に依つて、着々事業を進めてゐると聞く、田澤は感謝しつゝ、盃を舉げた「お歸りになつたら大山さんに宜しく言うて下さい、歸京次第早速會ひますが、何分今後とも働いて下さるやうに……それで大山さんからの御用件といふのは……」

「はい、はい！」遽しく箸を置くと、赤井は又一つ咳して「實は、その、何でござります、大山さんが直々お目にかゝりましてな、事務所の現狀も申上げたり、今後の方針に就いても御指揮を受たり、種々とお會ひ申さにやならん用向もござります

が、何分唯今のところは一寸外すことの能ぬ仕儀で、それがため態々私が参りましたやうな譯で……はい」

「御老體を煩はして濟まんですなア」

「いや、何う致しまして、これが私の役目でございますから、へへへ」と恐縮しながら、

「就ては資金の儀にござりますが、既に一萬圓近くも御出金願ひまして、事業も追進捗しました譯で、はい、處が……昨今又々纏つた運動費の必要を認めました、といふのは規定の事務所費以外に、株主募集費の方が豫算より大分超過しましたので、尤もそれには明細書を拵へて、この通り持参致しましたが」

言ひつゝ、鞆の中から一冊の書類を探つて、恭々しく田澤の前に置いた「これを御覽下さいますと篤りお胸に入りますやうな次第で、はい」

「いや、判りました、是はお預りして緩々拜見しますが……要するにもう何れだけ

出金せいと仰しやるですか」

「はい、はい！」と赤井は稍調子づいて、無意識に二つ三つ頭を下げ「誠に申兼ねますが、この際五千圓ほど御出金が願ひたいので、勿論、御歸京になりましたから、事務所へお廻し下されば結構で、はい」

「五千圓あれば好いのですか」

「左様でございます、それだけ出して頂きましたら、萬事好都合に事が運びますので……」

指の先を盃の縁にあて、密と田澤を見ながら息を呑む、雨を収めた空にはもう雲が切れて、この分ならば晴れるらしい。

熟と考へてゐた田澤は軽く頷くと、

「何とかして見ませう、遅くも明日は歸京ますから、着京次第都合をつけて、精早くお廻しするやうにしませう」

「や、それで私も安心しました、大山さんも何うか御承知下されば好いがと、内心配の様子に見受ましたが、御承諾下さつたと聞かせたらさぞ喜ぶでございます、いや安心すると一層御酒が旨いやうで、へへへ」

全然顔出せぬも悪からうと考へて、眞喜子は厭々ながら酒の座に出た、下には山崎と篠原が鶏鍋を突ついて、頻りに朝酒を呷つてゐる。

その五

経済界の順潮に白帆をあげて、目出たい金儲けの首途をした田澤學士、彼岸を南清一帯の顧客と定めて、雑貨その他の仲介業を営むといふ、既に一萬近い運動費を投じて着々會社の成立を急いでゐる。

けれども苦學して大學を出た程だから、田澤その人には一文の資金もない、中學を卒へて、土佐から出て来て、或時は俵を曳き牛乳を配る、高等學校から大學に移

つた時には、随分人の知らぬ苦しい境遇にあつた。

兎も角も無事に業を卒へて、學士の肩書を貰つて赤門を出たのがつい二年前だ、今尙一介の書生に過ぎないから、莫大の資金の出やう筈はないが……、これには領か
るべき理由がある。

茲に少しく遡つて、田澤と眞喜子との關係を説ねばならぬ。

* * * * *

田澤芳夫の故郷には父がある、兄がある、維新の際下賜された俸祿を田地にかへて、高知の在の江の口に移轉つて以來兄は百姓を、弟は學校に、勝手元一切を雇婆に任せて、親子三人が侘しく暮してゐた、尤も江の口に居を替たのは芳夫がまだ十三の時、母親はその以前高知の築屋敷で死んだ、頑固で偏狹で、昔氣質そのまゝの父の芳明は、兄の芳郎を家督相續人として、併せて祖先の墳墓を守らせ、弟の芳

夫は小學が濟と、すぐに苦しい中から土地の中學に通はせた、世間普通の教育はして遣る、それから先は勝手に働けと宣告した。

されば中學五年の證書を握ると、芳夫は父に乞うて些少の旅費を得た、海路を神戸へ、更に東京へ、その實頼る者もないお先眞暗。

俗に活馬の目を抜くといふ、彷徨すれば馬車に轢れる、是非とも身の振方を附ねばならぬが、芳夫には絶るべき先輩もなかつた、固より國許の送金は絶望だから、茲に於てか、勢ひ自己の力を頼まねばならぬ、俵を曳たのも、牛乳を配つたのも、要するに手段を選ばぬ死物狂ひの結果で、首尾よく高等學校に入學すると、傍目も振らず熱心に勉強した。

恰も芳夫が競争的試験に及第して、更に大學に入つた頃であつた、偶した事から懇意になつたのは、今の新細君たる眞喜子の父親で、その頃麴町の二番町に住んでゐたが、もう官を罷めて、尠からぬ恩給を貰つて、極めて幸福な餘生を送つてゐる

老人だ。

この老人若い時から一向に道楽酒を飲まぬ、妻のお琴が評判の儉約家であつて、始んど三十年間必死に働いたため、今では四萬に近い財産を抱へて居る、たゞ不足なのは男の子のない事で、姉嬢を九子、妹嬢を眞喜子と名けて、兩手に花の蝶も些か心細い。

何の途養子をせねばならぬが、さて貰はうとなると故障の出るものだ、帯に短かつたり、襷に長かつたり、親の氣に入つた男は娘が嫌ふ、これならばと幾分油が乗ると、財産を目的の入夫と知れる、従順な女らしい眞喜子に引かへて、兎角九子はお俠の性質。

「眞喜さんを相續人にしても構はないから、妾に半分だけ財産を別けて下さい」と何時も口癖のやうに駄々をこねる、暇さへあれば小説を讀んだり、詩を作つたり、若い男の訪問客もあつて、流石の政之老人もこれには持餘した。芳夫は新しい知己

を得たので、學業の暇には殆んど親戚同様に出入してゐた、母親のお琴も二人の娘も、芳夫を他人のやうには取扱はない、況や苦學して大學に入つた忍耐と勤勉とが、全然政之の氣に入つて了つて、その頃から田澤家の養子にする腹であつたらしいが、尙一年程はそのまゝで居ると、遂に耐へ兼ねて政之が口を切つた、姉でも妹でもお望み次第、是非ともこの家の跡を繼いで、娘と末長く暮して下さい、失禮ながら學資一切は、私の方から文辨しまするといふ口上。

俾を曳た境遇から比べると、勿論夢のやうな話であつた。

その六

小糠三合持てば入夫にはならぬ、折角苦學して漕付たものを、今更他人の財産に縫つて、鮒馬たる名稱に甘んずるは口惜しい、學資を見て貰つたところで後が二年だ、牛乳の華客先も今では固定してゐる、飽まで獨立の意思を貫かうと決心して、

この儀許りはと謝絶した。

茲に於てか、老人尠からず失望したが、待て／＼急いで事は仕損する、彼程の男を養子に取るには、あの男に勝る辛棒が肝腎だと、それ以來は妻にも言合めて、一層芳夫を大切に待遇た、病氣と聞けば直に眞喜子を遣る、何々の祝ひだと稱しては芳夫を招く、なるたけ娘を接近させて一日も早く纏まるやうにと希つた。それから一年と経ち二年となる、愈々芳夫が大學を卒業して、莞爾しながら田澤家を訪問すると、政之老人の喜びは一通りでなかつた、平素は儉約な母のお琴までが、命令もせぬ先から洋食を注文する、上等の葡萄酒を取寄せる、二人の娘には美しく着飾せて、先々お目出度いと下へも置かぬ款待、老人は我子が卒業したかのやうに、唯だほく／＼して他愛がなかつた。

勿論故郷の父からも兄からも、重ねて喜びの書状が着た、自から働いて最高の學府を卒る、斯てこそ男子としての價値があるのだと、頑固なだけに父の手紙は堅く

るしい。

苟くも學士の名稱が附くと、まさか牛乳の配達もして居られないから、芳夫はその株を他の學友に譲つて、八年振に故郷の地を踏んだ、この機逸すべからずと見て取つた老人は、己れも琴平參詣の口實を作つて、序だから高知も見て置ませうと、迷惑する芳夫を強ひて説つて俱に連立つて土佐へ渡つた、芳郎には嫁が出来て、もう子が産れて、父の芳明も著しく年を老つたが、併し例の頑固と昔氣質とは、相變らず年と俱に増すばかりだ。

總領の甚六とは萬更の蔭口でない、芳郎は甚六に似た温順な好人物で、與へられた田地を耕しながら、不平も嫉妬もなく、呑氣に暮してゐる、寧ろ弟の出世を喜むで、名物の鯉をタタキにしたり、畑から野菜を抜て來たり、心にあるだけの御馳走を並べて、さア遠慮なう喫べて呉れといふ、煤けた侘しい百姓の破家も、芳夫には物珍らしく慕かしくて、つい箸を置く事すら忘れてゐた、況んや好人物に配するに

好人物を以てしたやうな、質朴な嫂の愛想を見ると、それが如何にも嬉しく感じたので……。

十日程はたい笑つて暮らした、老人同士は氣の合ふのも早く、芳明と政之とはいつか無二の友垣を結むだ、そうして十分に信用を得た後に、例の養子問題を擔ぎ出して、是非とも娘の婿にと申入れた、萬一養子がお嫌ひとあれば、娘を嫁に差上りもと凄じい意氣込。

元より芳夫の身體に就ては、成べく當人の意思に任せる考へだから、一應芳夫に相談すると、既に獨力をもつて大學を卒業した今、これからは波瀾の多い社會に乗出して、大いに腕一杯の働きをせねばならぬ、それには——敢て資産に眼を着けるではないが——田澤家を後援にして置く事も、奮闘する上に於いて何かの便利になる、且は妹娘の眞喜子ならば、氣立も好し、従順な女だし、十人並以上の勝れた標緻を持つて、深く芳夫を慕うてゐる様子、兎も角お約束だけして置ませうと、遂

に我を折つて承諾したから、政之老人天へる登る心地。

縁談成就の吉報と珊瑚珠の根掛とを土産にして、老人は尙吳れくも依頼しつつ、一足先に東京へ歸つたが、芳夫はそれから一月程土佐にゐて、今度は飄然南清地方へ飛むだ、上海から田澤家に音信のあつた時は政之老人尠からず氣を揉んで、なるべく年内に歸京せよと打電した、同時に三百圓を行先に送つて、身體を大切に病はぬやうに。

* * * * *

芳夫は三十歳、眞喜子は二十一歳、華燭の典を擧てまだ半歳にもならぬ。

その七

「勿論大山を上京させて一應帳簿は調べて見るがね、兎に角五千圓だけ出して貰

ひたいと言ふのだ、既に一萬近く注込んだ後だから、舅様に申上げるのも甚だ辛い譯だが……と言つて今更捨てる譯にもゆかん、何とか旨く持ちかける方法はなからうか」

籐椅子に凭れて、天井を見ながら、芳夫は恚う言つて息を吐いた、僅か四萬に足らぬ財産の中から、既に小一萬の金を引出した矢先、又々五千圓の無心は如何にも厚面しい、さればとて此ま、拒絶しやうものなら、是まで入れた金が空に消えて、徒らに世間の物笑ひとなる、所詮は乗かけた船と度胸を据ゑて、是非とも會社を成立させねば、第一田澤家に對しても申譯がないと、いつになく力のない沈むだ調子で、沈と眼を瞑ると口を噤む。

その顔を横合から覗くやうに見入つて、眞喜子も尠からず胸を痛めた。

元來今度の事業に就ては、有紫に政之も小首を傾けて、一應再考するやうにと忠告したが、芳夫の決心は動かすべくもなかつた、十分の見込と固い方針を立て、

断じて決行すると折入ての頼み、二千や三千の金なら捨てても宜からうと、激しく反對したお琴を押へ付けて、已むなく承諾したが序の口となつて、愈々横濱に事務所を置く、社員を入れる、株主募集の趣意書やら、收支豫算書やら、帳簿什器、京濱間の汽車賃、俸代、各種の運動に要した経費、その他創立一切に關する費用を支辨して、まだ二月と経ぬ内に、最初の三千圓が消て了つた、更に二千圓、續いて千圓この外三百圓だの？二百圓だのといふ小口を合せて、概算八千何百圓の支出を見る

と、政之よりはお琴が仰天して、忽ち田澤の家庭に悶着が持上つた。

何を樂みに三十年の間、夫婦が汗になつて働いて來たか、漸く世間並の身代に仕上げて、寝てゐても贅澤に暮せるものを、今になつてやくたいもなく減されては、第一この先が案じられると、半分は女の愚痴も交つて、押付けられた腹癩から、好物の政之に喰て蒐る。

これには老人ほとく持餘して、表面芳夫には好い顔を見せながら、その實苦し

い立場にゐる事を芳夫は疾うに推してゐるので。

況んや姉嬢の丸子が何を感じたのか、昨今著しく放縦に流れて、ともすれば奇矯な振舞も見える、さらぬだにお俠な性質だから、この女がすねくると手も附けられない、針持つ指にペンを挟むで新體詩を作る、歌を詠む、男の客を己が居間に迎へて、時にはビールを抜く、葡萄酒を薦める、酒にほてつた顔を屢々政之に見られて、小酷く叱られた事もあつた、併し當人は平氣なもので、朝出ると晝食は何處で済すやら、夜も十一時を過ねば門を潜らぬ、最初の内はお琴も氣を揉むだが、我を折つたの力が無くなつたのか、却つて眞喜子よりは丸子を犒はつて、今では言なり次第にさせてある始末だ。

政之が、麴町から市ヶ谷田町に移つて、芳夫夫婦が千駄ヶ谷に別居して以來、萬更の僻目とも思はれぬほどに、眞喜子に對するお琴の態度が變つた、勿論親身の母子の仲だから、打付けたやうな他處々々しい素振はないが、丸子と眞喜子とを比較

すると、より多く丸子を愛して、兎角眞喜子には冷たい心が見える、夫は單に親の手を離れて、良人の手に轉つたといふ許りでなく、金には濫いお琴の平素から考へて、八千餘圓を失つた不平の結果が、或は娘にまで當るのかも知れぬ。

慙うした感情が湧いて居るのに、この上五千圓の無心は如何にも覺束ない、政之ならば男の事だし、何方かと謂へば諦めも早いから、尙ほ折入つて頼めば厭とも謂ふまいが、傍にはお琴がある、銀行の通帳を保管してゐる、公債から地面から株券から、一切の管理を司どつてゐる以上、假令政之は承知しても、お琴が頑として應じなからう、嬋天下に似た家庭の原則として、この難關を破るのは容易な業ぢやない。

その八

夫婦は顔見合せて太息を吐いた、着京次第早速都合をして、精々早く廻さうと

承諾したが、愈々本家の金を絶望だとすると、創立事務所の運轉を中止するか、思ひ切つて解散するか、いづれかその一つを選ばねばならぬが、何か他にまだ餘地はあるまいかと考へた。

故郷の江の口には多少の田地があつても、それは芳夫の所有でない、汲々として働く兄に對して五千圓は愚か百圓の無心すら不可能だ、頑固な昔氣質の芳明に相談したところで、頭から叱られるぐらゐが落だから、故郷に於ける金策の希望は絶對にない。

然らば東京は何うか、南清地方は何うか、これまた田澤家を除いては一文の融通も利かぬ。

苦學八年、辛うじて贏ち得た學士の肩書も、一個の指環、時計にすら劣つて、漬しの利かぬこと夥しいものだ。

尤も五千圓全部を急に用意して、右から左へ費消する譯でもあるまいから、大山

に逢うて帳簿も調べて、十分に金の使途も明かにした上、或は最初に二千圓、乃至千圓、次に千圓なり五百圓なり、順次に拵へてゆけば事が足るかも知れない、所謂寸を伸して尺善を計る手段は、一應調べた上の事にしやう。

心に這廢事を考へながら、芳夫は當度もなく眼を轉じてゐた、篠原と山崎が何をしてゐるのか、キャツ／＼と笑ひながら巫山戯廻つてゐる、その聲が如何にも呑氣らしく面白さうに耳を衝いた。

良人の傍に頬杖突ながら、これも黙つて考へてゐた眞喜子は、聽て顔をあげて耳に口を寄せて極めて低い聲で囁いた。

「ねえ貴夫、阿母さんが彼廢ですから、到底肯いては呉れまいと思ひますわ……ですから……思ひ切つてね、餘り好くない事だけれども、脊に腹は替へられませんわ」

「ふむ！」と眼を上げて眞喜子を見て「他に方法でもあるのかね」

「え、」

「聞かうぢやないか、溺れる者は藁でも掴むといふよ、是非教へてくれ」

「貴夫、屹と賛成なすつて」

「賛成するとも！」むくくと起直つて莞爾した芳夫は、仇氣なく顔を寄せて、

「甚麽方法だ？、真喜さん」

「仕方がありませんからね、斯うなさいな、彼の代々木にある宅の地面ね、あれは將來妾の所有にするんだつて、いつか阿母さんが言つてゐましたからね、あれを内内で抵當に入れて……」

「えッ！」有繋に芳夫は眼を丸くして驚いた、

「可けなくつて、貴夫……」

「那麽事をして好いかね」

「悪くても仕方がありませんわ、然うでもしなさいや、差詰困るぢやありませんか、

彼の地所なら三千圓やそこらは借られませうし、妾から伯父さんに話をして、千圓位拵へませうしね、衣類や頭のを何とかしたら、あとの不足位甚麽にかなりますわ、兎に角都合して御覽なさいな、それより外に好い手段はないでせう」

如何にも最上の手段はない、この際真喜子を依頼するより他に芳夫は何等の方法も持たぬ。

深く深く嘆息した芳夫は、再び籐椅子に凭れて腕を拱んだ、苦しい八年間を學資と奮闘して、今又金のために神心を勞する、可愛や、妻にまで氣を揉すのかと、思はずほろりとして横を向いた。

陰鬱だった昨日の雨が霽ると、箱根は忘れたやうな好日和で、今日は珍らしく温かい風が吹いた、裏の笹藪に鶯の啼くのが、ゆつたりした長閑な春らしい氣持をさせて、もう都は櫻に近く桃も大抵は散つたであらうと思はせた、芳夫と真喜子は午前中窃々打合せをして、晝飯が済むと漸く宿を出た、山崎も篠原も同時に旅支度を

して、俱に新橋まで行かうと言ふ。
同勢四人、華やかに打興じて山を降る。

一 田町の新邸

新に買入れた市ヶ谷田町の邸宅は、脚下に外濠の土堤を控へて、一望廣く麴町の半面を望む、春ならば軌道に沿ふ一帯の紅雲、風なきに散る吹雪を見るべく、夏は不断の涼風を容れて、更に都の熱鬧を知らず、中秋の觀月と、置炬燵の雪見酒と、四季折々の變化を硝子越に眺めて、政之老人、一もなく二もなく氣に入つた。

家族は親子三人の外に、下女が二人、飼犬が一疋、他に口のついた物は電話だけで、最初贅澤だと反對したのを、丸子が是非にと無理から強請て、お琴が横合からその肩を持つて、遂に老人を屈服して了つた。

電話番号何番の太文字が、忽ち丸子の名刺を飾ると、その月から宿車が忙しくな

つて、例に依り朝出たまゝ一向歸らない、今では親の方が慣れてゐるから、さほど心配もしなかつた。

恰も四月の第一日曜日、朗かに晴れた朝の風を受けて、二臺の俾が威勢よく外濠を走る、聽て田町の高臺に梶棒を下して、先に立つは芳夫、續いて眞喜子、田澤邸の表門から鈴を押して上ると、色の黒い中年増の下女が出迎へた。

「おや、入らつしやいませ、何時お歸京でございましたか」

「一昨日歸京たよ」と顧みて莞爾する、

「まア、左様でございましたか、些とも存じませんで、おや奥様も大層お丈夫らしくお成り遊ばしたと、矢張り温泉は那麼に利くものですかね」

「お土産を持つて來たから、後で進るわ」

「難有うございます、毎度頂戴する許りで、ほゝ、何うぞ此方へ」

いそぐ先に立つて行く後から、夫婦は黙つて跟て往つた、良人を持つて他に別

居すると、父母の住居ながら妙に珍らしくて、何となく他人の家らしい氣もする、割合に広い中庭に沿うて、五間の廊下が鍵形に附けてある、その廊下を抜けると光線の暗い陰氣な四疊半に長火鉢を置いて、お琴が頻りに解物をしてゐた。

足音を聞いて偶顔を上げたが、夫婦を見ると有繋に笑顔を作つて、

「何うぞ此方へ………否え、此處でも構はないから………一昨日歸京たさうね………」

一寸會釋をすると、芳夫も笑ひかけて、

「はい、日の暮前に東京へ着ました、早速參上筈でしたが、他に取急いだ用もありましたので……眞喜さんお土産を出さないか」。

「阿母さん、これはね、箱根の挽物細工ですけれど、餘り上手に出来てゐましたから、お土産の意で買つて來ましたわ」

風呂敷包の中には針箱がある、煙草箱がある、玩弄物には惜しい程の鏡臺やら、

手文庫やら、如何にも手際の巧い美しいのが入れてあつた。蕩けるやうな顔をして手に取つたお琴は、幾度か裏を返して感心しながら「商賣ほど怖いものはないねえ、賣らうと思へばこそ骨を折るのだよ、何うすれば斯う旨く出来るだらう、難有う貰つて置きますよ」

「姉さんは？阿母様」

「さア」と言つたが襖の外を見て「今日は何處へも行かない筈だし、多分庭にでも出てゐるのだらうよ、芳夫さん、まだ父親さんに會はないでせう」

「はい、是非お目に懸りたくて伺ひましたが……何處におゐでいますか」

「今し方茶を飲んでゐましたつけ」言ひつゝ立たうとして又膝を落し「眞喜さん、芳夫さんを、書齋へ御案内してお進げ！それから久濶だし、種々話もあるしね、手が隙たら此室へお來で」

「では、一寸失禮します」と目禮して、芳夫はさつさと廊下に出た、續いて眞喜子

が座を立つた。

「妾も阿母様とお話がありますわ」

「あゝ、だから直ぐお來で、姉さんには後で逢へば好い」

俯向勝に出て行く眞喜子の姿を、お琴は瞬きもせず見送つたが、無意識に鉄を取つて、その手を額にあて、火鉢に凭れた儘うつとり考へ込んだ、猫でも發見たのか怖しい聲を立て、飼犬のジョンが消魂しく吠立てる。

その二

「ほう、山崎と篠原が、うん／＼、途に迷うて……いや、若い者はそれ位の元氣がなうては可かん、相變らず面白い人達ぢや、それで一緒に歸京しましたかな」

「はい、新橋で別れましたが、當分忙がしいと言うてゐました、如何です御容體は？」

襦袢の上に綿入二枚を重ねて、鼠色の被布を着た政之老人は、禿上つた頭をつるりと撫で、無髯の頤をモグ／＼させながら、

「や、大分好い、安心して下され、この分ならまだ二三年は持つ、はゝゝ、芳夫さん、人間も死ぬ方へ近くなつたら駄目ぢやな、これでもまだ一人前の元氣はあるが、身體の方が言ふ事を聞いてくれん、いや、一昨年能う土佐へ行かれた事ぢやと、今になつて自分ながら感心してゐます」

「元來丈夫な御體質ですもの、二三年は思か、ずんと長壽が出来るですよ、氣を落さずに精々養生して下さい」

尤も芳夫の養子問題に就て、態々土佐へ渡つた頃は丈夫であつた、近年から始めた晩酌も一合位平げてゐたが、昨年の夏、不圖風邪を冒いて以來、急に身體の工合が悪くて、俗にいふ老人のブラ／＼病、勿論金に不自由のない隠居だから、起たり寝たりして養生してゐる。

「何うちやな、例の横濱の方は」

「それに就まして今日は御相談に参りました」

「應、應！」

「お庇で事業も着々進捗しまして、既に豫約の株数が三千に達して居ります、尙ほ十分成功する見込が立ちましたので、この際全力を擧げて經營したいと思ひます
が……」

「それが好い、それが好い！」老人は頻りに頷いて「人間の資本は努力だ、金許り多く懸けても努力がなうては駄目ぢや、世間にはな、たい資本金さへあれば事業が能る、金が儲かると穿違へて、無法に資本主を責立てる者がある、間違ふた話しぢやないか、十の努力に五萬圓要るとすれば、五分の働さには十萬圓掛るよ、なるべく少い金で多く儲けやうとするには、第一に人間が働かんと可かん」

「私もそれを承知してゐますから、東京にゐる横濱を監督するのが甚だ不便だと感

じまして」

「尤もぢや！」と又頷く。

「就ては住居の件ですが、この六月までには是非とも成立させる豫定で、大山始め熱心に働いて居ります、この際私も横濱へ移轉して、自ら采配を振る必要を認めましたから、今日はその御相談に上りました」

何處か落ついた奥床しい態度は、いつも老人をして嬉しがらせる、三千圓に次で二千圓千圓と、苦もなく引出し得たのはこの態度の賜だ、今日も又老人悉く氣に入つて、即座に横濱移轉の相談を承諾した。

「一日も早く往つしやい、人任せでは事が捗らぬ、今は汝さんが一番の責任者だ、東京に居ると横濱に居るとは、第一社員の心得からして違ふ、元より俺に異存はないから、明日にでも早々往つしやい」

芳夫は窃かに安堵した、横濱へ移轉の必要を認めたのは、社員督勵のそれもある

が、他に重大な理由がある、箱根の山中の姥子の宿で、眞喜子と打ち合した最後の手段、到底五千圓を引出し得ぬと悟つて、代々木の地所を抵當に入れる事と、眞喜子が伯父の田澤五郎助に頼んで、千圓許り借出す事と、不足すれば非常手段を用ひて、夫婦が赤裸になる固い決心を、勿論老人にもお琴にも謀らず——いや謀つては大變だから——思切つて實行して一時の急を救ふ、期限前には會社も成立するし、規定の株金が入れば融通の利く譯で、借金さへ返せば文句のない道理、その實行には千駄ヶ谷にあるより、横濱へ移つた方が萬事好都合だ。

氣の短い老人を安心させるために、態々兩三日中に移轉する事と決めて、あとは四方山の雑談に耽つた、箱根七湯の中でも姥子の淋しい事や、地獄谷の底には火の燃えてゐる事や、元の山崎篠原の噂に返つて、頻りに老人を喜ばせてゐると、電話口に出た女中が入つて來た。

その三

「千駄ヶ谷の旦那様に申上げますが、今晚學士會を開きますに就て、種々お打合せをしたいとかで、本郷の事務所までお越が願ひたいと斯様に申して參りました」

闕の外に手を突いて女中が言ふ、芳夫は聞終つて頷きながら「あ、宜しい、直ぐ伺ひますと返辭してお遣り」

「畏りました」

女中の立去つた後から、老人に暇乞ひして今度は以前の茶の間に來る、芳夫の聲音を聞いてひたと話を止たが、お琴は何氣ない顔をしてゐる、眞喜子は俯向いて沈と考へてゐる、

神經的にならと眉を寄せて、芳夫は軽く會釋すると「これから本郷へ廻りますか、今日はこれで失禮します、眞喜さんからお聞き下すつたでせうが、急に横濱へ

移轉する事になりまして」

「然ですつてねえ、でもお仕事の都合だから仕方ありませんわ。さ、まあ好いぢやありませんか、緩りして往つしやい」

けれども芳夫はもう腰を浮せて、學士會から電話のかゝつた事を告げ「是非往かんと待つてゐますから、では失禮します」斯う言つて表玄関に出で、待せた俚に乗ると辭し去つた。

慌て、送り出した母子は、又元の席に就て、

「平素は落着てる方なのに、何か用が出来るかと忙しい人ね、矢張り箱根でも彼處だつたかへ」

お琴は笑ひながら茶を啜る、今年で丁度五十になるが、まだ水々しい若い處があつて、四十五六と言はれても嘘とも謂へぬ、慾で固めた苦勞の割合には、額にも顔にも小皺の數が尠い。

「まさか！」と言つて眞喜子も笑つた、その笑つた後から淋しい顔をして「全く阿母さん困るのですもの、それに横濱へ引越すにしても、二十圓や三十圓は要りますからね、是非百圓だけ貸して下さいな」

「困つた奥さんだねえ」と又笑つて「お金の生る樹を持ちやゐまいし、さうくは汝無理ぢやないか、それに！一萬圓近く出たものだから、甚麼に妾の手許が苦しんだらう、少しは阿母さんの身にもなつてお呉れよ」

「えい、お察しゝてゐますわ……けれども、今度のは已を得ませんもの、明日にも引越すつたつてお金がなくしては」

お琴は上目にちろりと見て「芳夫さんは學士ぢやないかね、大學を卒業した程の豪い人だもの、舅の脛許り嚙らなくつたつて、それ位のお金は出來さうなものぢやないか」

ともすれば皮肉な言葉が出る、大學を出て南清を廻つて、日本へ歸つてからまだ

一年も経たぬ、會社を唯一の事業と頼んで、着々設立に盡力してゐるのだから、他に収入の途はないのに、何故這麼情ない事を言ふのかと、眞喜子は沁々恨めしくも思つた。

「愁ひ金を借らうとすればこそ厭な言葉も聞く、寧ろ借らずにこのまゝ歸らうか、否、それでは差詰移轉するに困る、箱根の雑用が豫算より高かつたので、もう小遣錢の殘餘も少い、何と言はれても無理から頼んで、是非借て行かうと思ひ返した。沈と俯向いて思案する横顔を覗くと、流石にお琴も可哀相な氣がして、強ひて知らぬとは言切れなくなつた、良人を持てば苦勞するは當然だが、金にまで苦勞させるとは思はなかつたのに、學士の良人も當にはならないと、兎角理屈が芳夫の上に乗つて、これは又沁々娘を憫れむだ。

「汝、本統に困るのかへ」

眞喜子は眼をあげてお琴を見て、

「本統も嘘も阿母さん、妾がお頼みするのですもの」

「那麽事はあるまいけれどね、世間には亭主が道樂をして、碌々女房を構ひ付ないものだから、實家へ嘘を吐いて來る者が間々あります、那麽馬鹿々々しい事だと聞くのも厭だが……」

「阿母さん！」と耐りかねて眞喜子は衝と膝を寄せた、泣出しさうな眼をして熱く見た。

その四

相手は肉身の母、その母が言すがなの當こすり、さらぬだに不愉快な眞喜子の耳には、嘲るやうな、侮辱するやうな、如何にも意地の悪い意味に聞えたので、覺えず膝を寄せて、

「阿母さん！」と呼んだが、眼には一杯の涙が溢れてゐた。

お琴も些か驚いた調子で「何うしたのさ、汝妾に腹を立たのかへ」
 「否、然うぢやありませんけれども！」慌て、涙を隠して「他處の方は知りませ
 んがね、芳夫に限つては……決して那麽事をする人ぢやありませんわ、自分で働
 いて學校へ通つて學士にまでなつた位ですもの、世間並に見るのは酷うございます
 わ」

「ほ、ほ、氣に觸つたら御免よ、何も芳夫さんを指して言つたのぢやないのだから……」
 自分でも幾分言過たと思つたのか、急に氣を變て笑顔を作り「折角の頼
 みだし、引越に要るといふなら仕方がないわさ、今度だけ何とか都合して進げやう
 よ」

「是非ね、それでないと妾困るのですもの」

甘へたやうに淋しく笑ふ、頭髮にこそ丸鬘は載てゐるが、親の前に出るとまだ娘
 の心だ、吻と安心して息を吐たところへ、姉娘の丸子が入つて來た。

年齢は眞喜子と二つ違ひだけども、いつも氣の若い、活々した女で、譬へば温
 室から出た薔薇を見るやうに、その癖ヒステリー性の神經的な疳癢を含むで、これ
 まで我儘一杯に押通して來た、何方かと謂へば、派手な點に於て、丸子の方を妹にし
 たい位だ。

流行の夜會結、縞の荒いお召の袷、厚板の帯を胸高に結むで、頸からだらりと金
 鎖を這はせてゐる。襖を開けてひよいと顔を出す。

「おや、千駄ヶ谷の奥様、入らつしやい」

「おや、厭だ！」眞喜子は微笑んで「今姉さんを探したのよ」

「何處で」

「お庭にゐらつしやると聞いたものだから……此方へお入りなさいよ」
 それには答へないで四方を見ながら「芳夫さんは何うなすつたの、一緒ぢやない
 の」

「一緒には来たがね、本郷に急用が出来て歸つた處なのさ、那麼處に立つてゐないで、此方へお入り！」とお琴が言つた。

「真喜さん、妾の部屋へ入らつしやいよ、好い物を見せて進る」

「行きませうか？」斯う言つてお琴を見ると、跟てお往でと言はぬ許りの顔をして、

「御馳走させてお遣りよ、姉さんはこの頃馬鹿にお金持だから！」

「あゝ、御馳走するとも！真喜さん、お來で！」と言捨て、氣も心も軽く飄然と往つて了ふ。

真喜子は尙くくも母に頼んで、歸宅までには金を調べて貰たいと言置いて、廳で廊下の向ふの丸子の部屋に入ると、疊の上には毛氈を敷詰て、丸いテーブルに二三脚の椅子、花瓶には早咲の櫻が挿してある。

丸子はゆつたり椅子に凭れて、眼鏡越に真喜子を迎へ、
「變つたでせう、妾の部屋が」

「全部ハイカラになつたのね」

「貴妹なんぞに斯うした趣味は判るまいけれど、一體日本風の座敷は陰鬱で可けないわ、近い内に離座敷を貰つて、あれを全部西洋風にする意なの」

丸窓の前には脚の高い机を置いて、五六冊の洋書が無造作に並べてある、その傍にはインク壺の蓋が開いて、ペンもペン軸も亂暴に抛り出した儘だ、更に掃除した事がないらしい。

與へられた椅子に腰を下して、真喜子は漸と寛きながら「この頃は何か讀んでゐらして」

「讀みますともさ！」急に手を伸して一冊を引寄せ「劇の研究をやつてゐるのだけれど、判らない箇所があるから弱つてゐるの」

「誰方かに教はれば好いちやありませんか」

「フン」と鼻の先で笑つて「碌々修養もしない文士なんぞに、神聖な文藝の味が解

るものですか！」そろ／＼氣焰を吐かける。

その五

喋舌せて置けば果しのない丸子だが、相手は従順な眞喜子なり、全然趣味の違つた人なり、神聖な文藝の議論を吐て見たところで、暖簾に腕押より尙頼りがないから、ちらと氣焰の糸口を出しかけた儘で、直に話を外して了つた。

「箱根は面白かつたでせう、……それに相愛の郎君と御夫婦連だから」

「厭よ、姉さん！」流石に眼の縁を赤くして、

「山崎さんと篠原さんが入らしつてね」

「おや、あの二人が……東京から一緒なの」

「否え、姥子にゐるとひよつこり出會ましたの、些とも知りませんでしたかね、何でも湯本から舊道を登つて、十國峠へ廻る筈でしたつて、それが途を間違へて散々

迷兒になつてね、ほ／＼、到頭姥子へ出て了つたのですとさ、箱根へ来るやうな話もなかつたのですのに」

丸子は手を拍つて笑つた「馬鹿ねえ、何うして彼の二人は慌てゝゐるんだらう、それでまだゐるの、彼方に？」

「否え、妾達と一緒に歸りましたけれど、何だか忙しいとか言つてゐましたわ」

勝手元からのつそり出た斑猫が、廊下の真中で一つ大欠伸をして、又のそ／＼中庭の隅に消えた、何處やらで頻りに鶯が啼く。

「山崎さんでも遊びに来れば好いに」と丸子は獨言しながら「山崎さんの下宿は何處でしたつね」

「神田の猿樂町でせう、清陽館とか聞いてゐますわ」

「貴妹、往つた事があつて」

「否え、一度も！」と丸子を見て「妾、男の方を御訪問した事がないから」

「さう／＼貴妹は貞淑な方だつたつけ」
態とツンとした顔を見せて「矢張り女大學に囚はれた婦人は不自由ね」
「姉さんのやうに自由思想がないから」
肉身の姉妹は寄會ふと慕かしい、串戯も言ふ惡まれ口も叩く、それでも別段腹も立たぬ。

この時丸子は恍惚すると、夢見る人のやうに考へてゐたが、バツチリ眼を開いて笑ひかけて「眞喜さん芳夫さんは親切な方？」

「え！」と笑つてゐる、

「仰有いよ、好いちやありませんか、何かの又材料になるから」

眞喜子は笑つて答へない、

少し焦れ氣味で「隠さなくても好いわ、親切だか何うだか……それに、ほ／＼、眞喜さんに是非ね、新婚の感想が伺ひたいわ」

中年増の女中が入つて来て、丸子に一寸茶の間までと謂ふ、煩ささうに椅子を離れて、

「眞喜さん、一寸待つてゐて頂戴」

「え、御緩り」

女中に連れられて丸子が出た後で、眞喜子は椅子に凭れたまゝ暫く待つてゐた、ぼかぼかと温かい日が南から射して、黙つてゐるとつい眠りさうだ、椅子を離れて、机の前に立つて、重ねた洋書の中の一冊を取る、無心に幾頁かを展げてゐたが、不圖何物をか發見た時に、眞喜子は我知らず赤くなつた。

「まア、戀文なんぞ！」

思はず口走つて、慌てゝ表紙を閉ぢて元のところへ恐々置くと、椅子に凭り懸つて胸を撫でた、所謂囚はれた婦人の頭脳には偶然ながら怖しく思はれたので。
少時すると丸子が歸つて来た、一寸机に眼を附たけれども、別に怪む風も見えな

かつた。

「今日は緩りしておゐで、何か御馳走して進るから」

「難有う……姉さん、見せて下さるつて甚麽ものなの」

丸子は急に笑出して「この部屋さ、女大學一點張の方に見せやうと思つて、態々貴妹を連れて来たのだけ」

「さう」と言つたが眞喜子は窃かに姉の心を卑んだ、自由思想といひ自覺した女といふ、放縦と自由とは違つた筈なのに、何故ごつちやに考へてゐるのだらうと氣の毒にも思つた。

一 綺麗な囃

横濱港内の全景を庭園の向ふに並べて、坐ながら出船入船の壯觀を見る野毛の高臺、櫻の頃は紅雲の綾を書いて、月にも雪にも相應かるべき一構は、表札に赤井禮

造と記してあるが、附近では赤鬼の住居だと評する、純日本風の二階の欄干に、折々白い顔の浮て出るのは、鬼棲む宿にも活た花があると見える。

一重は咲たが八重は是れからといふ、恰も芳夫夫婦が田町の新邸を訪れた、その第一日曜日の正午過といふに、二人曳の俵が門口に留つて、肥つた赤ら顔の大男が玄關に立つた。

取次の下女が出て姓名を聞くと、會社の大山だと簡單な返辭、間もなく赤井があたふた出て来て、

「や、これは飛むだ失禮を……下女奴が新米でございますからな、頓と貴君のお顔を知りませぬで、さア何うぞ此方へ」

殊更に港内見晴しの座敷へ連込んで、茶を出すやら、菓子を出すやら、廳で赤井の妻が座に現れて「おや、よく入らしつて下さいました、先日は又結構なお品を頂戴致しまして！」

色は淺黒いが眼尻の釣上つた、何處か垢抜のしたそれ者らしい顔立、赤井に比べて三つか四つ下だらう、婆さんの部に入るべき若い年をしながら、未だに爪外れは艶かしい。

洋服の釦を外して太い腹を突出した大山は、押出すやうな笑ひ方をして「ナニ、詰らん物です、禮を言はれちや却つて恐縮する、併しこの座敷はいつ來ても氣持が好いね」

「へ、へ、へ」と赤井は得意さうに「唯だな、これだけが自慢でございまして、はい」妻のお高を顧みて「用意せんか」

「はい、只今、娘を此方へ呼ませうか」

「應、お酌は若いに限るよ、なア大山さん、へ、へ、へ、へ」

「また酒かね」と言つて莞爾したが、敢て辭退する様子もなかつた、

野毛もこの邊は至つて便利だ、凡そ來客を接待するに於て、馳走の材料だけは遣

憾なく調へ得られる、卅分と經ぬ内に、食卓を運び、注文の品を並べ、お酌には赤井の娘のお民が座に着いた、明けて廿歳だと謂ふけれども、色の白いのと、仇氣なのにと、二重脣の底に人を引付ける愛嬌とがあるもので、見た處は七か八か、春風徐ろに吹く盛りの頃を、憎や紅梅の蕾の花なり。

「何もございませんが何うぞ召上つて……」

赤井夫婦とお酌のお民とが、三方から頻りと攻立てると、大山少からず悦に入つて、快く盃を廻してゐた。

主客十二分の満足をした頃、

「なア大山さん、先日の姥子ぢやが、何うでござせう、お見込は？」斯う言つて窺つと大山の氣配を窺ふ、

軽く頷いて盃を受けて「大丈夫、全額は難しくても、半分位は持つて來るよ」
「左様かな」

「導くに道理を以てする、相手が常識のある男だから已を得んさ、總て理詰の仕事だからねえ、椋鳥を扱ふやうな譯にはゆかんよ」

つるりと一つ額を撫で、「や、御尤もで」

「それよりは大詰の幕に弱つて居るのだが、いづれ一芝居打にやなるまいて、この場合には赤井君、大いに働いて呉れんと困るよ」

傍にはお高もゐるお民もゐる、けれども謎に齊しい話だから、何を言ふのか二人には判らない。

飲だけ飲んで、喰ふだけ喰ふと、そろ／＼欠伸が出さうになる、氣を利かして膳を引いた後には、別室に茶菓の用意をして、此處でもお民が勉めて周旋した。

大山は最前からお民の顔にのみ見惚れてゐたが「赤井君！—

「はい、はい」

「君の娘さんは美人だね」

「へ、へ、へ、頓とハやお多福でございまして」

「實に好い縹緖だ、これなら大丈夫、大詰の幕には是非使はして貰はう」

「ヘッ！」と顔を上げて眼を圓くしたが、赤井にはその心が判らなかつた。

その二

「廿歳にもなつて何うだらう、全で子供のやうな氣ぢやないか、少しは將來の事も考へなくちやならない」

脂で詰つた長羅宇の雁首を叩いて、頬を凹せながら暫く吸うてゐたお高は、到頭諦めたのかほいと抛り出して、くるりと向直るとお民の顔を見入つた、贅澤な桐の長火鉢を中に挟んで、母子が最前から茶を啜つてゐる。

「でもね阿母さん、ほ、ほ、何だか怖いから」

仇氣ない顔を一層甘へかけて、お民は稍居すまひを崩して言ふ。

「怖いものかね、一度はお嫁に行かなきゃならないし……それに汝、大學を出た方だから、潰金にしたつて百兩がものはあるわさ、宅の阿父様より豪い人だよ、旦那の方が」

「……妾でも、好いと仰有るか知ら」

さつと薄紅の霞を隔て、お民は夢見る心地であつた。

これより先、別室の密談が小半時、大山を玄關まで送り出して、直ぐ引返した赤井は二階に上ると、窃にお高を傍近く呼寄せて、何やら頻りに囁き合つてゐたが、今度は赤井が俵の支度をして、セカ／＼しながら大急ぎで出て行く、夕飯が済んで電燈が點いて、母子が一緒に風呂から上ると、緩々茶を飲みながら異な事を切出した。

と言ふのは今度の雜貨株式會社に就て、大山が常務取締役、赤井が平の社員で會計係、その上には大學出の立派な紳士で、田澤さんといふが社長の椅子に就く、

まだ三十になるかならぬ青年だが、學問もあり、才識もあり、將來は立派な實業家となつて、幸福な生涯を送る身分だ、妾と謂つては如何にも賤しいが、今の奥様は虚弱な質だし、甚麼やら旦那とも氣の合はない様子、辛棒したところで二年か三年、必ず運が向いて來るからと、己が心に引比べて親の口から薦めるのであつた。

「汝さへ承知ならば、後は此方で好やうに切廻すから……併し直ぐといふ譯にはゆかないよ、却々旦那が固い方ださうだから……是れといふのも汝のためを思つてだよ、出世させたいために苦勞するのだわね」

「……旦那が厭と仰有つたら何うするの」

これにはお高も些か驚いた、十五や六の娘ぢやあるまいし、馬鹿々々しいと唇まで出たのを、態と引込せて笑ひながら、

「何うでも好いさ、妾達のするやうに任せてお置き」

その晩遅く赤井が歸つて來た。何處で飲んだか熟柿のやうになつて、座敷へ轉が

るともう他愛がない。

「まア大層酔つてゐらつしやる事、何うでせう、この體裁は」

「うふッ、大きなお世話だ、俺の勝手に俺が飲む、汝達の知つた事ぢやないよ、時にお姫様はもうお寝みか」

「今頃まで誰が起きてゐるものですか、三時を打ましたよ、貴夫！」と突慥貪に言ふ。

「は、は、叱るな、叱るな、二時が三時でも俺は構はない、ところでお姫様御承知かな」

「何がですよ」

「おつと、忘れまい、酔うてもまだ本性は違はんぞ、それ、一件よ」フラ〜になつて立うとするのを、慌てゝ上から押つけて「浮雲いから沈としてゐらつしやい、今の話なら翌朝しますよ」

「今日東京から手紙が来たのだ、愈々その、横濱へ引越して来るので、適當な家を探せと仰有る、は、は、呑氣なものだ、加之に女中も好いのがあつたらと言ふわえ、些と好過ぎる代物だが、儘よ出世のためには替へられん、大丈夫だらうな、お姫様の方は」

「大丈夫ですよ、さア、お寝みなさい」

「おつと難有い、それが大丈夫で目的通りゆくとすると、茲で一吋三千圓ほど儲かる、は、は、さうしたら尾上町の奴と」

「え、何ですつて！」眼の色變へてお高が膝を寄せると、赤井禮造又フラ〜になつて、

「いや、何も申しません、御免いへ、御免いへ！」その儘床の中へ藻潜込むが早いか、ぐつすり夜船の高舳

その三

足を棒にして奔走して甲斐があつて、赤井の邸宅からはつい三町程の、山王の高臺に適當な家があつた、禮造自身に下女と車夫とを指揮して、全部掃除萬端の準備が終ると、花の盛の十五日といふに、芳夫妻が東京から引越して来た。

大山を始め十五六人の社員が、何れも羽織袴で停車場に迎へる、初めて良人の世に出た風采を見て、多勢に畏敬されるその態度を知ると、真喜子は夢のやうに、唯嬉しくて、つい微笑を示さずにはゐられなかつた。

赤井の背後にはお高も跟いてゐた、その横の方に肩をすぼめて、お民が躊躇しながら會釋した、俣を連ねて野毛坂を登つて、一先づ赤井の邸宅に落着くと、改めて赤井がお民を紹介させて、當分下女代りにお使い下さいといふ、芳夫は欣然として頷いたが、真喜子は人知れず胸を衝いた。

新に住む家と赤井の邸宅とが、つい手近にある事すら厭だのに、その娘まで宅に引取つて、朝夕世話させるは如何にも不愉快だ、勿論今逢ふた許りだから、まだ氣心の程も知れないが、よしこの娘は温順にしろ、斯うなると、愈々深い關係が出来て、始終赤井が遊びに来はせまいか、あの厭らしい、眼尻の下つた、何處となく淫卑た赤井の顔を見ると、真喜子は急に頭が重くなつて、座にすら耐へられぬ心地になる、それが毎日のやうに度々來られた日には、到底身體が保まいと考へた。

併しこの場合、強て押切つて、赤井の厚意を謝絶する勇氣もなかつたので、「何うぞ宜しくね、横濱は些とも知らない土地ですから、萬事貴女にお頼みますわ」とそれでも真喜子は殊更に莞爾した、廿歳だといふのに子供のやうな、お民は赤くなつて幾度か叩頭するのみ。

家財道具一切を運び終つて、夫婦が漸く落着いたその日から、お民は下女とも附かず、お客様ともつかず、唯何となしに手傳旁々、芳夫の家庭の人となつて、氣も心

も軽く働いてゐる。

尤も真喜子に取つて見ると、東京に近いとは謂へ知らぬ土地だ、朝出て日暮頃歸宅する良人の留守中は、兎角話相手が欲しい、山出しの下女では何處か物足ぬし、悪く阿婆摺た女は危険だから、それにはお民が詭向きで、嫌ひな赤井の娘でさへなくば、真喜子は手を拍つて喜むだかも知れぬ。

芳夫の勤勉は驚く許りであつた、朝は八時前後に出勤して、時には夜遅く歸ることもある、偶々早く歸宅しても、食事が済むと別室に引籠つて、頻りに帳簿を検査してゐる、餘り働いては身體の毒だからと、折々真喜子が心配して言ふと、ナニ捨て、置き、大丈夫だと、相變らず熱心に奔走する。

この家に来てから赤井が一度と、妻のお高が二度程來たゞけで、兎角する内半月ほごを過ぎたが、一向顔出しをする氣配も見えぬ、真喜子は窈かに胸を撫で、このまゝ來て呉れなければ好いと希つてゐる。

されば主人の不在勝な家庭では、真喜子とお民のたゞ二人限りだから、自然お民とも親むやうになつて、馴れては女同士の氣も心も合ふ、臺所の掃除も食膳の支度も、真喜子とお民とが助け合つて、遂には隔てのない頼母しいものに思つた、内氣な温順な、良人思ひの真喜子の氣性には、仇氣ないお民が氣に入つたから。

野毛の櫻も見に行く、程ヶ谷の躑躅も見歸る、壯大な横濱港を見物して、今更ながら日本の文明の發達したのに驚いた、伊勢佐木町の繁華や、居留地の風變りや、關の内外を隈なく見物して、横濱なる土地の大方は胸に入つた。

芳夫は相變らず忙しい、東京からは誰もやつて來ない、不圖真喜子は金の事を想ひ出して、あれから何うなつたのかと氣を揉みはじめた。

その四

今日は臺所をお民に任せて、解物をしながら真喜子は考へた、赤井の話に依ると

直にも要る筈の金が、何故か一向に手を付けやうとせぬ、眞逆不用に歸した譯でもあるまいに、不思議な事だと愈々氣が揉める。

それに東京からは手紙一本來ない、百里と二百里を隔てた土地ぢやなし、遊び旁旁來てくれても宜ささうなものだ、彼處に大騒をして養子に貰つた手前、今更冷たい素振を見せるとは、芳夫に對して申譯がない。

家も片付いたし、留守をお民に頼んで、一寸田町へ行かうかとも思つた、併し明日にも調金に蒐つて、代々木の地所を何うかする日になると、是非とも東京に歸らねばならぬ、伯父の五郎助にも逢うて、事情を打明けて、千圓なり、千二百圓なり、都合の能るだけ都合して貰つて、足らねば夫婦が裸體になる、兎も角大切な瀬戸際を切抜けるまでは、却つて誰も來てくれない方が……然うだ、此方からも一切顔出しせぬが好い。

それにしても、何時會社が出来るのか、金は何うなつたか、差詰月末の支拂もあ

る、今夜は最非とも良人の意を聞かう。

珍らしくお高が訪ねて來た。

「御近所に居りましたもね、つい何や彼や取紛れまして、何とも申譯がございません」來る早々無沙汰の詫をして、お高は手土産の菓子を出した「何うせお目にかかるものぢやございませぬけれど」

眞喜子は氣の毒さうに熟と見ながら「他人行儀ですこと、もう這麼事は遊ばさないで……」

「いえね、ほんのお茶菓子にと思ひまして……如何でございます夫人、お使ひ悪いでせう彼の娘は」

「いえ、大層喜むでゐますわ、本統に好い方をお願ひしたつてね、それに……お臺所を願ふのは氣の毒だし、別に下女を入れやうかと思つてゐますけれど、お民さんが要らないと仰有るものですから……」

「飛んでもない！」と手を振つて「下女をお置き遊ばさないやうに、あの娘を差上たのですもの、何卒御遠慮なくお使ひ下すつて……まだ貴女廿歳だといふのに子供でね、ほい、カラ罪のない赤嬰ですから」

別に用事がある譯でもなかつた、取止のない世間話をして、一時間ほど喋舌つてゐたが、廳で挨拶して座敷を出ると、お民を小暗い廊下の隅に呼むで、何か密々囁合つてゐた。

少時すると「では夫人、失禮致します」

「さうですか、またお來なさい、妾もその内伺ひますわ」

「えい、何うぞ入らしつて」

軽い駒下駄の音を立て、出て行く、その背後姿を見送つたお民は、手を拭きく

眞喜子の傍に来て、

「夫人、お手傳致しませうか」

「ナニ、好いよ、大方解いて了つたわ」

「旦那様はこの頃お遅いのですね、お忙しいのでせうか」

「然うだらうよ」と又鉄を取つて「會社の事なんど仰有る人ぢやなし、妾には判らないがね、遅いところを見ると矢張りお忙しいのだよ」

「大山さんが東京から歸つて、何だかゴタ／＼してゐますつてね」

「えい！眞喜子は顔を上げて不安らしい眼をした「會社が紛擾てゐるんですつて」

「えい、一寸今阿母様から聞きましたけれど……詳しい事は判りませんわ」

「何うして紛擾が出来たのだらう」

「父に聞くと判るでせうけれど……妾旦那様がお氣の毒だと思ひますわ」

お民は斯う言つて伏目になつた、眞實芳夫の上を氣遣うてゐるらしい。

會社は何うなつたか、金の調達が何故遅れるのか、今夜は是非聞かうと決めてゐた矢先へ、忌はしい紛擾とは氣懸りな。

その五

その日は珍らしく芳夫の歸宅が早かつた、馴た寔音を聞付けて、いそ／＼玄關に出迎へた眞喜子は「お歸り遊ばせ」

窃と顔を上上げて良人を見ると、いつになく方のない沈むだ調子で、軽く眼で頷いて衝と書齋に入つた、眞喜子も黙つてその跡に跟いたが、心の苦悶は禁じ得なかつた。

平素着を捧げて、脱捨て洋服を疊む間も、折々眼をつけて、良人の素振を見た、あの活々とした齒切の好い様子はなくて、頭の重さうな、胸でも悪さうな、病氣ではないかと思はれる程惻れてゐる。

扱はと思ひ當ると氣が氣でない、いつかお高の顔を出した事すら、模様を探りに來たやうにも思はれて、眞喜子は急に不快を感じた。

臺所に下りて夕餉の支度にかゝる、お民が頻りに話かけるけれども、眞喜子は唯だ機械的に返事する許りで、進んで合槌を打つ氣にはなれない、お民も張合が抜けたのか口を噤むと、皿を拭たり、香の物を切つたり。

刺身やら、吸物やら、芳夫の好きな數の子を添へて、茶の間の長火鉢の横に膳を据ゑる、沸つた銅壺の中へ銚子を入れて、

「貴夫、お膳が出來ましたわ」

「應！」と先方に向たまゝ答へた芳夫は、遠しく帳簿を繰つてゐたが、少時するとのつそり出て來て、

「鮪の御馳走か」と始めて莞爾した。

眞喜子は嬉しさうに、自分も莞爾して「二日ほど召上らなかつたのね、今日は好いでせう」

「毎日でも構はない、お民さんは？」

「お臺所よ、お酌は妾がしますわ」

芳夫は笑つて「お民さんに酌をさせるのぢやないよ、たい聞いて見ただけの事さ、眞喜さんもこの頃は嫉くことを覺えたのだね」

「まア、口の悪い！」お酌をして銚子を置いて、態と横を向く。

けれども是までのやうな華やかなものではなかつた、何處かに淋しい感情が湧いて、奥齒に物の挾つた不愉快な氣もする、お民の手前、打つけに問ひ掛けて、他人に聞されぬ秘密でもあつては、却つて事を破壊する虞れがあるので、例の會社の紛擾に就ては、寧ろ芳夫の説明を待たうと決めた。

臺所を濟せてお民が入つて來る、眞喜子は機嫌よく自分の傍に寄せて「お民さんお酌をして進げて下さいな」

「嘘だよ、おい！」と芳夫は手を振り「串戯を言ふと本氣にするから困る」

「妾、お酌しますわ！」言ふ間にもう銚子を取つて摺寄つたから、眞喜子はくすく

す笑ひ出した。

「夫人に叱られるよ」

「叱られやしませんわ、夫人と妾は仲好ですもの、ねえ夫人」

「お酌をさせてお進なさいな」

快く盃を出してお酌をさせた、芳夫は些か眼の縁に酒の酔が廻つて、疲勞も苦惱も洗ひ捨たやうな氣がした、聽て食事が濟むと、膳を引せてゆつたり火鉢に凭れながら、

「眞喜さん、明日は歸宅が遅いよ」

「さう、矢張りお忙しいのですか」

「む、忙しいに違ひはないが、東京へ往くと手間が掛るのでね」

「おや、往らつしやるの、明日？」

「應、會社の用向で是非往かにやならん、泊る事は斷じてないが……」

東京と聞くと田澤の家が戀しい、阿父さんも阿母さんも、姉さまも今頃は何うしてゐるだらう。

「妾もお供したいわ」眼で笑つて芳夫を見た眞喜子は、何處か子供のやうに甘へた調子、

「事に依ると——まだそれも判らんがね、例の箱根で話した一件さ」

「え、」

「眞喜さんに奮發して貰つて、大いにお助けを乞はんけりやならんかも知れん、尤もその場合には電報を打つがね、さうなると二三日は東京住居だ！」

聞かうとする話の糸口が出た、眞喜子は密と臺所に眼を遣つた。

その六

「あれッ限り何とも仰有らないし、不用になつたのかとも思つて見たりね、妾、甚

麼に氣を揉んでゐたでせう、少しはお察し下すつても好いわ」

折柄お民が風呂に出かけたを幸ひ、眞喜子は話の糸口を辿つて、晝間決めて置いた質問の矢を放つた、トドの詰は赤裸になる覺悟で、人知れず心配もしてゐますものを、冷たい素振は餘りなく、愚痴を交せて……。

「判つたよ、判つたよ」と芳夫は強く頷く、

「伯父さんが承知して呉れたところで貴郎、物の三日や四日は掛るのですもの、火のつくやうに言はれても困りますからね、今夜は是非伺はうと思つてゐました、それで、矢張り拵へなければ可けないのでせう？」

「實はね、眞喜さん、今までに話をする機會がなかつたのだ、又急速に必要な筈の五千圓は、大山に會うて話をした結果、一時に全額を要するものでないと判つた、赤井は彼麼慌てた男だから、大山の話を十分呑込まずに、無暗と心配して姥子へ來たのだよ、結局大山が五百圓拵へたので、今日までの遺縁をつけて來た譯さ」

「それが始めに判つて居ればねえ、這麼に氣を揉むんぢやありませんわ」

「今更愚痴を言つたところで仕方がない」なだめるやうに「今日まで延し得ただけが幸福さ、併し今度は愈々千圓要る」

「……千圓なら伯又さんに話をして」

「それだ、一つ眞喜さんに働いて貰ふのだがね……就ては大山の五百圓を返して、彼の男を解雇しやうとも思ふのだが」

お民の告た會社の紛擾は、愈々事實だと心に頷く。

芳夫は重ねて「要するに千五百圓だけ必要なのさ、千圓は會社の方に使ひ、残る五百圓を大山に返済するのだ、實は……這麼事は話する必要もないのだが、今日大山と衝突が起つてね」

「聞きましたわ」眞喜子は聲を濕ませて言つた。

芳夫は呆れて「誰に聞いた？」

「赤井さんの奥さんが見えまして、妾にはお話がなかつたけれど、お民さんに那麼事を言つたさうです」

「ふむ、赤井の家内が」

「何うして其麼、他人と衝突なんぞなすつたの、それに大山さんは貴郎の部下だし、大抵な事なら我慢してお遣り遊ばせな」

「赤井の家内が何うして知つたのだらう」と芳夫は頻りに不審してゐた。

眞喜子は、今言つたことが耳に入らぬらしいので、少し焦れ氣味になつて「ねえ貴郎、何故衝突なんぞなすつたの」

「いや、それには段々譯があるんだ」

例の癖の、神經的に眉を寄せて、如何にも急々した風を見せたが、心の苦惱と、遺瀨ない憤怒の色とが、酒の酔を醒すほど顔に出た。

眞喜子はそゝろに悲しくなつて「何か無禮な事でもあつたのですか」

「無禮どころぢやない、不埒千萬な奴だ」

「へえ、お仕事の間違いでもあつて」

曇みかけて聞かれると、つい氣が弱くなる、芳夫は熟と眞喜子を見ながら「大山は假面を被つてゐたのだ、今日まで私を欺いてゐたのだ」

「へえ！」と驚いて眼を睜つた、會社の一切を任せた大山に、良人が激怒する程の不正があるとすれば……慄然として身を寄せつゝ、

「それぢやお金でも使込んで」

「應、使込んだ許りぢやない、會社の名義で借金を拵へてゐるらしいのだ」

「まア！」と眞喜子も呆れて二の句が繼げなかつた。

飼犬に手を噛まれる世の譬へが、今の良人の上ではあるまいかと思ふ、大山にその様な不正があるとすれば、會社の前途も極めて心細い、眞喜子はつい涙含ますにはゐられなかつた。

その七

愚痴はこの場合禁物、深疵を負はぬ先に發見したのが幸福、大山には五百圓の出資金を返して、斷然會社から除名するとしやう、就ては千五百圓の調金だがと、芳夫はいつになく元氣のない顔で言つた。

勿論これは覺悟の前だから、今更眞喜子を苦める問題でない、伯父の五郎助に仔細を話して是非千圓を借て來るか、何なら代々木の地所を抵當に入れて、窃かに會社へ融通するか、いづれかその一を選ぶにしても、萬一會社の創立が不成功に終ると、この先何うなるだらうと又愚痴が出る。

「詰らん心配をして呉れちや困る！」と芳夫は稍氣色ばんで「成るやうに奔走してゐるのだよ、それを眞喜さんが心配したところで始まらんぢやないか、それとも千五百圓の調金に不安を抱くのかね」

「まあ、飛むでもない」と真喜子は打消して、

「不安に思ふなんぞと、其麼水臭い心は」

「真喜さんにはあるまいと信じてゐるがね、兎に角一つ働いて見てくれ、今が私の運命の瀬戸際だ」

如何にも芳夫には重大な事業である、世に出ると否とはこの一戦の勝敗に係はる、況んや田町の姑を怒らしてまでも、尠い中から一萬の金を引出した、萬一不成功に終らうものなら、到底日本に安閑としては居られぬ。

肝腎の話に氣を奪れてゐたので、風呂に出たまゝのお民には氣が附かなかつた、時計を見るともう九時前だ、彼是二時間餘りにもなるのに、未だにお民は歸つて來ない。

「随分お民さんは永いお湯だこと、何をしてゐるのでせう」と真喜子は笑つて言つた。

「何うだね、役に立つかね」

「それアね、下女をして廻る程に氣は利きませんけれど、家族が尠いのですもの、彼でも間に合ひますわ、第一温順しいのが取柄よ」

「赤井の子に似合はん美しい娘だ、鳶が鷹を生んだのだ」

「あら、悪口なんぞ仰有つて、聞えたら悪いわ」

夫婦が隔てなく雑談に耽つてゐるところへ、お民がすたく歸つて來た、湯上りの顔に薄く化粧をして、今宵は一段と彩えた縹緞に見える。

「只今、遅かつたでせう、一寸實家へ寄つてゐたものですから」

芳夫は態と冷評すやうに「お民さん、却々綺麗になつたね」

「ほゝゝ、然うですか」と笑つてゐる、

「廿歳になつてその縹緞なら、お婿さんの候補者が多過ぎて困るだらう、好いのがあつたらお世話しやうかね」

「夫人、彼座事を仰有いますわ、妾、お嫁になんぞ行きやしないのだから」
 真喜子も稍元氣づいて「妙ね、何故お嫁に行かないの」
 「でもね！」と口籠つたお民は、窃かに芳夫の横顔を見た、溢れるやうな微笑を湛へて、

「……怖いから！」

「怖いとは面白い、まだく怖い内が女の華だ！」と芳夫が手を拍つて笑つた、赤井夫婦に深い目的があつて、態とお民を押付けてあるのだ、真喜子は何處までも初心な娘として、今まで妹のやうに可愛がつてゐる、親の赤井こそ、顔を見るのも厭だが、その妻のお高は悪人でもないらしい、殊にお民は仇氣ない温和しい娘で、これが良人を寝取らうとする怖い娘だとは、元より真喜子の知らう筈はなかつた、利のためには娘を囮にする親、茲にも手を噛む飼犬がゐるやうとは！
 「電報ッ」と不意に玄關で呼ぶ聲、お民はあたふた駈出して往つたが……、

「田町から来た」
 臆 芳夫の手に電報を渡すと、發信人は田澤としてある、

真喜子は有繫に胸を躍らせて、伸上るやうに覗き込み「何を言つて来て？」
 颯と顔色を變へて「舅様が急病だ！」

「え、舅様が……」

夫婦は眼を見合せて太息を吐いた。

一本妻と妾

關内尾上町の料亭八百政の二階に、五六人の藝妓をすらりと並べて、他愛もなく酔うてゐる二人の客あり、朱の如くほてつた顔の眼尻を下げて、便々たる太ッ腹を突出した大山利助、後なるは年甲斐もなく禿頭を振立てた、誰あらう赤鬼の赤井禮造なり、賑やかに囃立て、今濟んだところ、藝妓も客もへとくになつてゐるが、

それでも口だけは相變らず達者だ、

「三重吉、茲へお來で、可愛がつて進るから」

「難有に！」と年増女が叮嚀に叩頭して、

「大山さんに可愛がらりや本望だけれど、これでも生命は欲しいんですよ、ねえ

辰子さん」

「本統よ、梅ヶ枝町に情婦があるさうだから、迂濶手出をしやうものなら大變だ」と合槌を打つ。

「好し、肱鐵を出したな、冷遇た位で引込む大山ぢやないぞ」

「大いに、然り！」と赤井が手を拍つ「大山さん、俺が尻押ぢや、うんと遣らつし

やい」

「お止なさいよ、赤井さん、それで無くてさへ悪巫山戯なさるんだもの、煽てたら甚麽事になるか知れないぢやありませんか」

フラ〜と立上つて年増の手を執ると、

「お門違ひでせう」

「否、町名番地將に判然してゐる、一寸彼方へお來で」

「ほ、何うでせう、意地の悪い、お隣りへ御相談なさいな」

「然うか、では汝だ！」と今度は若いのに手をかけて引くと、これは案外慄へ上つて、

「厭ですよ」と逃出した。

「は、然う嫌はれちや耐らん、赤井君、何とかして呉れ、この邊に色男の丸薬でも賣つてる店はないかね」

「左様さ、俺の若い時は随分本家になつたものだが、今は時勢が違ひますでな」

「君の丸薬ぢやア始まらんよ」と眼で笑ふ。

巫山戯たり、飲んだり、若い藝妓をキャツ〜言はせたりして、再び賑やかに囃

立てたが、時計を見ると、遽しく座に直つて、

「さア、皆な歸つた、歸つた」

「おや、もうお暇ですか」

「應、又明日會はう、これから稼業の話に移るのだ、俺は酔うても金儲けだけは忘れんでなア」

「ほ、然うでせうとも、何うぞ澤山お儲け遊ばして、精々藝妓に施して遣つて下さい、樂みにして待つてゐますから、難有う！」とぞろ／＼歸つて行く。

慌て、鹽焼を頬張つた赤井禮造、序に盃を干して膝を寄せて「大山さん、愈々田澤さんも上京しましたが、今度は病人を抱へてゐるから、一週間位は大丈夫ですせ」

「私の見込もその邊だよ、若し死亡でもすれば最と永くなる」

「併し一昨日は流石の俺もナ、蔭で聞いてゐて驚きました、いや、貴君は却々好い

度胸ぢや！」と頻りに感心して首を振る。

その輕卒な舉動を見た大山は、太ッ腹に大きな波を打たせて、押出すやうに笑ひながら、

「學士であらうと何であらうと、私の腕にかゝつたら子供同様さ、唯相手に依つて手段を替へるまで、この腹を突出すのは一つ型だよ、先生私を首にするらしいが、は、出來たらお目に懸る」

「併しな、大山さん、五百圓だけ返濟さへすれば、貴君に文句はないやうに言うてゐたから、先生事に依ると決りますせ」

「勿論、文句はないさ、五百圓を頂戴して引下れば、私の方に苦情のあらう筈はないさ」

「へえ！」と言つたが、赤井は妙な顔をして、

「すると……貴君はそれで引下りかな」

大山は再び高笑ひした、更に低聲で「私には文句がなくてもねえ赤井君、債權者の方に大分文句がある、いざと言へば内幕をさらけ出すまでさ、然うなると先生ちや始末が附ないから、結局大山君頼むと来る、は、は、は」と他愛がない。

その二

人間の作つた法律には隙がある、その隙を狙つて巧みに捏ね廻る、律義一遍を頑固だと笑ひ、正直者を阿房と罵る世に、監獄の近所まで足を踏入れて、浮雲い綱波りをせぬは大きな損だ、これが現代の俐口者だとあつて、學校出の若い連中を驚かした。

書籍の上で見る道徳や制裁は、要するに小さい悪人を拘束するだけの事だ、旨く交際して人心を收攬して、蔭で狐鼠々々細工をすれば、天晴手腕家の名を恣にして、富貴榮達意のまゝに行はる、大山利助は實にその一人であつた。

彼は中學の四年まで學んださうなが、卒業を見ずして退校した以來、郵船會社の下級書記を勤めて、次に大阪の某製糸會社に雇はれた、風采も好し、辯舌も巧みなり、相手の氣性を呑込んで臨機に處置する才能は、やがて某銀行の重役に見出されて、一躍その銀行の秘書役となつた、事務は形式なり、出世は先輩の庇護なり、利を得んとすれば幾微を要すと悟つて、彼は常にこの方面にのみ注目してゐた。けれども惜しい哉、彼のは悪才であつた、順道を辿つて順調に行くべき途を、邪道に外れて一擱の夢を見る、一時を糊塗し、彌縫するは易いが、もつて達識の士を欺くは難い、果して散々のボロを出した揚句、行金費消の犯罪まで露現して、危なく鐵窓に繋がれんとしたのを、幫間的愁訴の効果空しからで、辛くも繩目だけは免れ得た、爾來會社を渡り、小資本家を苦しめ、東京横濱の間を往來する内、まだ芳夫が大學にあつたころ、二三度顔を合した縁故を辿つて、愈々田澤家の養子になつたと聞くと、茲ぞとばかり腕によりをかけて、首尾よく藥籠中のものにしてしま

つた。

尤も會社設立の目的を起したに就ては、敢て大山に勧められたからでもない、芳夫が南清の各地を廻つて、詳さに彼地の状態を探つた結果、日本唯一の顧客たるべき土地で、肝腎日本品の評判が好くない、常に獨逸品に壓倒されてゐるのは、要するに粗製濫造のためだ、日本品ポイコットの起らざる限り、優秀なる品が勝利を博するのには、三歳の兒童と雖も否認すまい、勿論販路擴張の巧拙にも依るが、主として良品を輸出するに限る、それには不信用なる小資本家を相手とするよりも、堅實なる基礎の下に會社を組織して、堅實なる營業を開始して見たい、地に墜た日本品の聲價を挽回して、海外貿易の範を示さうといふのが、芳夫の胸中に浮んだ大なる目的であつた。

幸ひ大山には貿易に經驗がある、經濟の原則こそ學校で學んだけれども、實際と學理とは大いに相違するから、芳夫の學識と大山の實際的伎倆とを合せて、茲に完

全なる事業を遂行しやう、敢て巨萬の財寶は贏ち得ずとも、何等か貢獻するところあれば満足すると、一も二もなく、大山を信用した、直ちに横濱に事務所を置いて、株主募集の運動に着手すると、成ほど實際の事業は樂なものぢやない、創立費のみに小一萬圓を吸取られて、尙この先の維持を計らねばならぬ仕儀、兎角する内芳夫の眼にも、何うやら大山が臭さうに見えて來た。

疑へば物皆赤く映る、三百圓の保證金に氣を許して、大山の推薦で會計に入れた赤井、兎角そわ／＼した落着かぬ態度の中に、何處やら氣の置けぬ狡猾なところがあつた、曾て赤井が田澤邸を訪れて、山崎篠原等と一座した事があつたが、始めの程こそ慎んでゐたけれども、酔が廻ると狸の本性が出て、少からず家族を弱らせたものだ、毒吐く、罵る、厭味をいふ、散々飲んでぐつすり寝た翌朝は、殆んど生れ替つたやうにけろりとしてゐた、酒さへ飲ねば腰の低い男で、仕事をさせると可なり役に立つと、芳夫は何處までも善意に見てゐたが！

不審も疑ひも今では遅い、料理屋に注込む遊興の代價が、事務所の金庫から飛出す位は序幕だ、ドドの大詰の初狂言となれば、立役者の大山が捨撥の舞臺に立つて、馴れた大芝居を見せてやらうと謂ふ、それまでの英氣を酒で養ひの、今宵も八百政の二階に浮れてゐるのであつた。

その三

「老たりと雖も熾んなものだね、尾上町にレコのある事を知つてゐるぞ！」フツと酒臭い息を吐いて、大山は笑ひながら一寸ぐらかした、ひよつこり顔をあげて眼をパチくり「あゝもう知れましたか」

「蛇の道は蛇だよ、よく細君に叱られない事だ」

「何うして、何うして」と慌て、手を振つて「彼女に知れたら大變でございます、いやもう嫉く事に掛ましたらな、大山さん、有繋の私もほと／＼閉口で、何歳にな

つても嫉度いものと見えます」

「嫉れるほど優遇する男でもあるまいに……併し尾上町のは却々美人だ」

「貴君、何處で見なされた」

箸を置いて屹となる顔を、大山は冷かに顧みつ、「關外にゐたお年ぢやないか、あれなら二三度聘むだ事があるさ」

「ア、然うかな！」始めて釋然としてニツとすると、自分でも不思議な程嬉しくなつて、

「御案内しませうか、大山さん」

「君の妾宅へかね」

「へ、妾宅と謂はれると些と困りますが……何うです、三四人前此亭から運ばせて、もう一度飲み直しませうかな」

固より大山に異存がない、少々この二階も倦の來た折柄、お妾のお酌も風變りで

面白いと、八百政からはつい二三町南の、同じ尾上町の途ある路次を入つた。
勿論、船板塀に見越の松とはゆかぬ、一棟八軒の二階建てで、角から三軒目の格子
を開ける。

「誰方！」と奥で女の聲、

「おつと、お客様が二人、さア〜起きた起きた」

「突然に何うでせう、今寝やうと思つたところですよ」艶かしい寝衣姿のお年が、
襖を細目に開けて顔を出す、

「えい、落着てゐては困る、會社の大山さんをお連れ申したのだ、今八百政から料
理が来るので、何よりも先に、酒だ、酒だ」

「おや、入らつしやい」と聲をかけたお年は、有繋に面羞いのか躊躇してゐる。
無遠慮に押通つて胡坐を掻いた大山「到頭這麼處へ引込んで了つたのだね、併し
結構な旦那を持つてお幸福だ」

「冷評ちや厭ですよ……あの直に御酒を差上げますから」

船板塀もなければ見越すべき松もない代りに、宵から船を漕ぐ婆さんもゐない、
暫くするとお詔へが出来た、酒の爛がついてお年がお酌をする、以前外に働いて
ゐた藝妓で、屢々赤井に買はれた末が、何う説付けたか借金を拂はせて、今では爺
さん一人の所有權になしてゐる、極めて若作りに装うてゐるけれども、白粉を剃げ
ば二十五の大年増、これなん九尾の狐なりける。

「さア、大山さん、召上つて下さい、本統にお久濶ぢやありませんか、確か太田屋
でお目に懸つた限りですねえ」

「さう〜何か宴會のあつた時だつた、あれつ限り逢はんのかな」

「然うですよ、間もなく旦那に落籍されたのですもの」
ちらと秋波を大山に呉れたが、酔ふた赤井は一向御存じない。

「へへへ」と有卦に入つて「大山さん、此處はな、俺の保養場所ぢやで、何うか

秘密にお願ひ致します、ひよつと山の神にでも知れやうものなら、それこそ責殺されるかも知れませぬで、へへへへ」

「君は喰へん男だね、私を此處へ引張込んで、否應言はさぬ秘密の強請かね」

「先づな、その邊ぢやと思つて下さい、さアお年、お酌せんか」

フラ〜になつた赤井はもう他愛がない、大山とお年は頻りに眼で笑つたり、何か意味ありさうな顔をしたり、果は膝を突いたりして巫山戯てゐるけれども、天下泰平、家内安全、赤井禮造極めてお目出度い。

その四

今夜はお泊りなさいと袖を曳れた赤井、何うして〜命に係はる、兎角は山の神が恐しいとあつて、戸口まで大山を見送ると、直に赤井も俥に乗つた。

「いつ入らしても是だから困るわ、ぢやア明日は是非來て下さいよ、お待申して

居りますよ」と背後から被せられて、扱ハヤ年甲斐もなく浮れながら、尾上町の往來を大江橋に出る。

更たる夜の風は肌を掠めて冷たい、瞰下せば漫々たる春の水に浮んで、月に墨繪の高瀬船を畫く、地上に長い影坊師を這せて、俥は野毛坂を平沼邸の横を、大分汗になつた俥夫は喘ぎ〜、廳て赤井の家の門口に着いた。

「お歸りッ」と自分から俥の上で叫むで、禮造フラ〜と玄關に立つ。

「お歸りなさい、おや、又御機嫌ね」

寢衣のまゝで出迎へたお高は、俥夫に定めのお賃金を渡して、半ば抱へるやうに連込んだが、相も變らず酔ふた姿を見ると、

「好い歳をして、外聞ない」と眉を寄せた。

「へへへ、御忠告の段難有く拜聴仕つる、ところでもう何時かね」

「夜が明けますよ、貴郎」

「成ほど夜が明ける！」けろりとして振仰ぎ、

「けれどもねお高先生、借老同穴を重んずる私だからこそ、夜明前には必ず宅へ歸る、へへへこの心がしほらしいぢやないか、おい」

「お寢みなさいよ」

「はい、はい、寢ますよ、えい、寢んとは申しませんが、はへへ面白いわねえ、段々世の中が有望になつて来る、田澤先生大いに立腹してござるところへ、舅様の急病とは嬉しいぢやないか、なアお高！」

「貴郎、今夜は何處で召上つて」

「例の八百政さ、大山さんの御馳走に聘ばれて、歸途に尾上町の顔を見て……アツ、失策だ」慌て、口を塞いだが追付かない、

キリ、と眉をあげて摺寄つたお高は「何ですつて、貴郎、何うも先日から可笑い可笑いと思つてゐたら……尾上町に圍ひ者をしたのですね」

矢庭に胸倉を執つて捏ね廻す凄まじさ、一耐りもなく縮み上つて「アツ放せ、寢るから」

「否え、寢しません、さア仰有い、餘り人を馬鹿にして、さア仰有い！」

「これさ、娘の手前が」

「娘が何うあらうと構やしません、好い歳をして何です、さア仰有い、圍ひ者があるのでせう」

「うん……ある！」

「又浮氣が始まつたのですね、もう今度は聞きませんよ、明日直に追出してお了ひなさい、それが出来なけや妾が出て往きます！」と蒼くなつて責立てた。

他人に向つてこそ毒舌も吐く、厭味も言ふ、捨て、置けば随分亂暴も働くが、元來女房には頭の上らぬ赤井、況んやお高は人並勝れた嫉妬家だ、胸倉執つて捏ね廻されて、頭からガミ／＼やられた日には、酔うてゐなくてもへ／＼になる者を、

足も腰も宙ブラの體裁だから、手の弛んだを幸ひ、ころりと横に轉ぶと、前後忘却、
高軒たかいびき

お高は呆れて茫然見てゐた。

尤も昨今の赤井の景氣は、お高をして幾分その銳鋒を弱らしむるだけの力があつた、順境は女房を従順ならしむる秘訣だ。

翌日八時頃眼を覺した赤井は、寢床の中で大欠伸をして「おい、誰かゐないか」

「……………」

「煙草がないぞ、チヨツ」と舌打ちしつゝ、「困つた奴等だ、おい、誰かゐないかと謂ふに」

芳夫夫婦の上京中を暫時實家に歸つてゐるお民、勝手元からいそぐ出て來て「煙草がないんですか」

「阿母様は」

「さア、何處へ往らつしやいましたか、大方お風呂にでも」
序にその邊を見廻したが一向に見えぬ、居ない筈だ、顔を洗ふと直に衣服を改めて、疾うに尾上町の妾宅を探しに出たから……………」

その五

十坪の土間に數臺の俵を置く、中には舊式のガラ／＼もあるが、大抵は漆の濃い輕さうな護謨輪だ、赤く軒燈に車と記して、その横に小さく御帳場信濃屋、出入の忙しい割には餘り混雜せぬ、親方は評判の、氣の好い勘さんなり。

その車宿の軒下で梶棒が留ると、ばらりと膝掛を解いて蹴込を捨てたお高、恰も勘さんが欠伸した鼻ツ先へ、色の白い劍のある顔を寄せた。

「お早う」

「へッ」と勘さん一足退つて「お早うございます」

「一寸伺ひますがね」

「へえ」何の事たいと言つた風に、それでもまだ眼を丸くしながら「誰方をお尋ね
で？」

「親方、妙な事を伺ふやうですけれども、昨夜三時頃ね、野毛の赤井まで送つた若
衆があるでせう」

「お待ちなさいよ」太い鼻の穴を上に向けて、勘さん暫く考へてゐたが、急に振返つ
て奥を覗き「なア金公、昨夜野毛え仕事に往つたなア汝ぢやねえか」

「親方、二時頃なら俺だ」

「アツ、内儀さん、あるさうです、へえ」

「一寸、會せて下さいいな、少し伺ひたい事がありますから」

喰ひかけた箸を置いてのそく出て来る、金公ひよいと顔を見て「アツ昨夜は難
有うございました」

「さうく汝さんでしたね、丁度宜かつた、あの昨夜のお客ね、何處から汝さん乗
せて來たの」

「へえ、ありや何でさア、尾上町の一路次でね、角から三軒目の家ですが、何と
いふかお名前は存じません……」

「あのね、誠にお氣の毒ですけれども、妾をその家に案内して下さいいな、否え、只
はお頼みしません、足代だけは差上げますから……」恚う言つて熟と親方を見た、
口添してくれと言はぬ許りの目附。

何さま氣の好い勘さんなり「折角仰有るんだ、金公、御案内して進なよ」

お高は欣然として先に立つた。

路次から路次へ、近道を縫うて一路次に抜ける、お年の家の戸口に立つと、

「内儀さん、此處でさア」

「お世話さまでしたね」莞爾して紙入の中から、何程かの金を摘むで渡し「御苦勞

「さき！」

金公叩頭して歸つて行く。

と、お高は峻しい眼をして表札を見てゐたが、廳で落付いた風で土間に立つ「御免下さい」。

「はい」と奥からお年が出て来た。

一目見てそれと領きながら「あの、赤井さんの入らつしやるお宅といふのは此方様でございますか」

「はい！」と言つたがお年も怪訝な顔をして、

「貴方は、何方から？」

「貴女が赤井さんのお妻さんですね」

「……はい」

「御免下さい」とお年を押退けるやうにして、お高はさつさと奥の間に通つた。

有繫にお年も喫驚して「貴女、無暗にお上んなすつては困りますよ、失禮ぢやありませんか……」

そんな事には一向お構ひがない、悠々と長火鉢の前に腰を据ゑて「一寸、此處へお來で」

「まア、呆れた、何て圖々しい人だらう、勝手に他人の宅へ上り込んでさ、大きな顔なんかして……貴女、困りますよ」

「妾は赤井の妻だよ」

「えッ」とお年は二度喫驚した、同時に胸を衝いて蒼くなつた。

「赤井の家へ赤井の妻が來るのに、何も不思議はないぢやないか、汝さんに話があつて態々來たのだから……怖い事はないよ、此處へお坐りなさい」

ちろりと睨むだ眼は凄かつた、お年は途方に暮れて立すくんだ。

その六

常人の赤井ですら縮み上つて、命に係はると慄へる程の女房、謂はゞ懸命に隠してゐたのを、何うして此處が知れたらう、峻しく輝いた眼、妙に角張つた顔、この模様では一暴れ荒れると、お年は突差に覺悟を決めたが、内心は極めて穩かでないかつた。

打續いた日和に空も倦たのか、今朝はごんより薄墨を流してゐる、さらぬだに濕ッばい陰氣な部屋が、日當りの悪いために一層暗い、不意に消魂しく鼠が鳴いて、天井裏をガタ／＼響かせた。

「毎度良人がお世話様になりますこと、お交際の始めにお禮だけ申して置ますよ、ところで今日は御相談だが、恚うして會つて見りや姉妹も同様だから、寧ろ野毛の方へ一緒におなりな、第一汝さん、二軒を構へたんぢや費用が耐らないわね、妾と

仲好く暮す方が氣樂ぢやないか……」

姉妹同様は嬉しい言葉だが、この人の口からは怖しいとお年は息を喘ませて「難有うございますがね、妾一人の考へにもゆきませんし、いづれ旦那にも相談しまし
てね、ひよつと然うでもなれば何分宜しく願ひ申します」と體よく逃げる。

その旦那に相談がお高の氣に入らぬ「赤井は何うにでもなります、赤井の事まで汝さん心配してくれなくなつたつて好い……善は急げだから明日にでも疊んでお了ひ……」

「まア、飛んでもない！」と眼を丸くして「其麼譯にはゆきませんよ」

「え、出来ないとお謂ひかへ」

「出来るものか、出来ないものか、内儀さんまア考へて御覽なさい、恚う言つちや失禮だけれど、何も貴女に拵へて貰つた所帯ぢやなし、旦那にも意といふものがあ

りますアね、それを此方だけで勝手に決られるものか何うか、それぢや貴女は無理を仰有るんです」

「何が無理だよ、おい、お妾さん、何が無理なんだよ」と膝を寄せる、最初から喧嘩腰に出たお高に取ると、道理の解つた話が面倒臭いので、勿論同居すると切出したは表面の口實、何うでも叩き出さうといふのが腹の底の魂膽だ。

今にも掴み懸らんす氣配を見たお年は、阿房らしいのと疝癢に觸つたのとで、さうさうは下手に出てゐない、惚れてお妾になつた譯ぢやなし、人を馬鹿にすると、ついむかつ腹が立つ、べつたり坐つて熟とお高を見入つて、

「何うすりや汝さんの氣に入るんだよ」

「え、何だつて？」

「愚痴も熱も好い加減に吹くが好いや、最前から温順しくしてりや何だい、這麼腐れ所帯が汝さんは惜しいのかよ、ほ、ほ、意地の汚い内儀さんぢやないか、欲けり

や遣るから持つてお歸り」

ガラリと調子を變へて思ふ様毒吐く、今度はお高が受太刀になる、隙さす更に疊みかけて「さア、持つて行かないかよ、恚う見えても妾はね、汝さん

のやうな窮屈な身體ぢやないんだよ、厭になりや明日にでも左様ならだ、汝さんには大切な亭主か知らないが、妾にはさう難有い人でもないのだから、序に旦那も仕舞つて置くが好いや、馬鹿々々しい」

「汝は恩を受けた旦那まで悪くいふのかへ」くるりと横を向いて煙草を輪に吹く、

「ヘン、亭主を悪い者にする内儀さんは豪い者さ、何處の國に逢つた事もない妾の宅へ暴れ込んで、好な御託を並べる奴があるものか、内儀さんは内儀さんらしく、茶の間で針仕事をしてゐるが好いや」

「何だとへ、お妾の癖に、何だとへ」

「お世話様だ、お妾をしやうと何をしやうと汝さんの御厄介にはならないよ、打捨

つて置けッ、人ッ、見りや汝さんも以前は泥水にゐた人だね、何處だへ、眞金町の安格子でも稼いでゐたのかへ」
有繫のお高も氣を呑まれて、眼ばかりくるく／＼させてゐた。

一 急病

急電に接した芳夫婦は、恰も上京の用向を抱へてゐたので、翌日留守一切を赤井に託し、打連れて田町の田澤家を訪れた。
玄關まで出迎へたお琴の顔には、いたく憂愁の色が現はれてゐる、平素は勿返るほどの威勢の好い丸子も、この日はしほらしく口を噤むでゐる、取敢ず政之の病狀を聞くと、お琴は鼻を詰らせながら語つた、その後身體の工合も好し、機嫌も好いので、格別心にも懸けてゐなかつたところ、前日湯を浴つて流し場に佇むで、餘念なく手足を拭いてゐると、突然卒倒して人事不省、危ふくその場で息を引取るところを、辛うじて介抱して病室に移したが、醫者の診断は重い腦充血で、茲二三日が最も大切だといふ、芳夫婦は意外なのに驚いた。
青葉若葉を疊の目に這せて、坐ながら翠綠を吸ふ奥の離座敷の病室、高い枕に横はつた政之を見ると、眞喜子はもう胸が一杯になつて來た。
突差の裡に恚うも變るものか、見違へるほど面糞れがして、氣の故か手も足もげつそり瘦せてゐる、三十餘りの看護婦が白い服をつけて、今し方藥を與へたところであつた。
夜具の裾近く座を占た芳夫は、暫く老人の顔に眼を着けてゐたが、一切談話を禁じられてゐるので、一寸目禮すると部屋の外に出た、茶の間には眞喜子がハンカチーフを濡して何かくどくど語り合つてゐた、假令平素は甚麽感情を持つてゐるにしろ、恚うした際は親身が泣寄りだ、お琴は頻りに芳夫婦を頼りにして、繰返し／＼滯在してくれと言つた。

つて置けッ、人ッ、見りや汝さんも以前は泥水にゐた人だね、何處だへ、眞金町の安格子でも稼いでゐたのかへ」
有繫のお高も氣を呑まれて、眼ばかりくるく／＼させてゐた。
急電に接した芳夫婦は、恰も上京の用向を抱へてゐたので、翌日留守一切を赤井に託し、打連れて田町の田澤家を訪れた。
玄關まで出迎へたお琴の顔には、いたく憂愁の色が現はれてゐる、平素は勿返るほどの威勢の好い丸子も、この日はしほらしく口を噤むでゐる、取敢ず政之の病狀を聞くと、お琴は鼻を詰らせながら語つた、その後身體の工合も好し、機嫌も好いので、格別心にも懸けてゐなかつたところ、前日湯を浴つて流し場に佇むで、餘念なく手足を拭いてゐると、突然卒倒して人事不省、危ふくその場で息を引取るところを、辛うじて介抱して病室に移したが、醫者の診断は重い腦充血で、茲二三日が最も大切だといふ、芳夫婦は意外なのに驚いた。
青葉若葉を疊の目に這せて、坐ながら翠綠を吸ふ奥の離座敷の病室、高い枕に横はつた政之を見ると、眞喜子はもう胸が一杯になつて來た。
突差の裡に恚うも變るものか、見違へるほど面糞れがして、氣の故か手も足もげつそり瘦せてゐる、三十餘りの看護婦が白い服をつけて、今し方藥を與へたところであつた。
夜具の裾近く座を占た芳夫は、暫く老人の顔に眼を着けてゐたが、一切談話を禁じられてゐるので、一寸目禮すると部屋の外に出た、茶の間には眞喜子がハンカチーフを濡して何かくどくど語り合つてゐた、假令平素は甚麽感情を持つてゐるにしろ、恚うした際は親身が泣寄りだ、お琴は頻りに芳夫婦を頼りにして、繰返し／＼滯在してくれと言つた。

「年齢が年齢だからねえ、いつ甚麼事になるか安心が出来ない、貴君もお忙しいでせうけれども、二三日は是非都合して下さい、ヤマさへ見えりや此方のものですが……」

「仰有るまでもありませんよ、最う一度恢復して貰はんと困るですから、歸れと仰有つても歸る譯にゆきません、併しこの上は醫者だけが頼りで、我々の力に及ばんから困る」と息を吐いて腕を拱む。

「伯父さんは！阿母さん」と真喜子が訊いた。

「今朝一寸來たがね、又後程來て呉れる筈だよ」

その伯父さんに是非頼まねばならぬ事が……併し今は切出す時でない。

打明けて言ふと芳夫のためにはこの二三日が最も大切だ、大山を鹹にして根本的に改革する、新に千圓の運動費を以て、必死懸命の活動を起す、既に大山と衝突した以上、一日も永く任せて置く事は出来ぬのみならず、大山の人格としては、溫和し

く留守する筈もあるまいから、何方にしても永引くは大なる不利だ。

と言つて政之の病氣が稍怠つて、一同の愁眉が開けた時なら知らず、この場合伯父に對しての無心は、千圓が百圓でも難かしい。

不安な會社と、不安な急病と、いづれかその一を見ねばならぬ芳夫の胸中は、義理と事業の中に挟まれて、顔には見せぬが苦しい立場に落ちた。

正午過て間もなく伯父の五郎助が來る、政之によく似た三ツ下の弟で、今尙本所の某會社に重役を勤めてゐる、福徳圓滿な無髯の紳士で、田澤家の財産を盛上げた裏面には、この伯父さんの力が大いに加はつて居るとか。

「やア芳夫さん、大分久しく會ひません、何かこの頃は横濱かな」いつも氣の軽い莞爾した調子、

「失禮して居ります、一向にお訪ねも致しませんで……」

「いや、お互ひでござす！」お琴の方を向いて、

「些とは宜しいかな」

「何うもね、妾達には解りませんが、まだ何とも變つた氣が見えませので……」
病人の話になると、お琴は話よりも先に息を吐くのだ。

その二

病人には最も大切なその三日目が来た、横濱は薄墨の空模様であつたが、東京は朝から小雨が降つた、畳も床も湿々するやうな氣がして、四月の末だといふのに綿入を着る程の寒さ。

「これだから困るのだよ、お天氣が爽快しないのでね、病人には一番可けないのさ、せめて明日はお天氣にしたいものだ！」

慇う言つて空を見上げたお琴は、ゆるく流れて行く雲脚を逐うてゐた。

「阿母さん、眞喜さんは！」背後から絶るやうに顔を覗いて「何を言つてるの？」

娘

「否さ、明日は天氣にしたいと思つてさ」

「今喋舌てゐたのはその事なの」

お琴は半ば呆れながら「折角話をしてゐるのに、汝耳へ入れてお呉れぢやないのね」

「然うぢやないわ！」と丸子は笑つて「少し考へ事をしてゐたものだから、眞喜さんは？」

「さア！」と振向いて茶の間を見たが、其處には誰もゐなかつた「何處へ往つたらうね」

「阿母さん！」密と低聲で四方に眼を配つて、

「妙な事があつてよ、昨夜ね、妾が二階へ上つて見ると、表の六疊に眞喜さんがゐたの、否え一人で……芳夫さんは風呂から上つて、伯父さんと下で話してたぢやありませんか」

娘

「あゝ、彼の時かへ」つい釣込まれてお琴も顔を寄せる、
「するとね、妾の足音を聞いて、慌て、何か隠したものがあつたわ、姉妹の仲だのに水臭いと思つたから、是非お見せつて責めたけれどね、何うしても見せないぢやありませんか」

「何だらう？」

「何か判らないけれども……是まで眞喜さんが其麼事をしたことがないから……秘密にする位ですもの、屹と重大なものなの」

「お金？それとも書いたものなの」

「お金なんぞ持つてるものですか、あの貧乏人に……」嘲るやうな微笑を洩して、

「書いたものでせうさ、書籍なら見せるに決まつてゐるけれど……」

「ナニ、大した物ぢやないよ、又良人を持てば自然秘密も出来やうぢやないか」と

お琴は殊更に打消したが、何處か氣にかゝる風もないではなかつた。

三時頃醫者が来て診察した結果に依ると、病状は漸次下り坂だから、この分ならばと初めて愁眉を開く、醫者の笑顔は家人の眼に救世主の如く迎へられて、言合したやうに微笑んだ。

前の晩泊込んでゐた五郎助はこれを聞くと、

「やア大きに安心した、今日は他に用もあるで失禮する、精々介抱して下さい」と言置いて、晩飲も食はずに歸つて往つた。

政之の發病以來、殆んど火の消えたやうな静かな田澤家は、醫者の一言が和樂の芽を萌して、人も部屋も急に活々して來た。

その日の夕食には低い笑ひ聲も聞えて、珍らしくお琴の口から姉妹を笑はせる串戯も吐かれた。

その中で、最も強い力を得たのは芳夫である、萬一政之に逝れたら何うなるか、芳夫のためには唯一の後援者たる政之が死んでは、總ての方面に於て少からぬ打撃

を受ける、第一に田澤家の整理、將來の方針、財産の處分をも附けるとなると、丸子の身體の結着をも考へねばならぬ、姓を田澤には改めたもの、果して芳夫が相續するか否かは、格別確乎した相談の下に決めてはないので、是等の繫累に係はつてゐては、一方會社の進捗に大なる障害となる。況んや最後には……萬々一會社が不成功に終つて、その後始末をする最後の場合には、是非とも政之の力を假ねばならぬ、勿論斯くあるべしとは希はない事だが、何方にしても政之の壽命は、芳夫に取つて大なる關係がある。

快く晚餐を喫して、眞喜子と俱に茶の間を出やうとした時、一通の電報が芳夫の手に入つた、急いで封を切つて讀下した芳夫は、例の神經的に眉を寄せたが、顔には見る／＼不安の色が湧いた。

發信人は横濱の大山利助、眞喜子はおど／＼しながら密と覗き込んだ。

その三

「氣になりますわ、大山さんからせう、矢張お金の？」

べつたり坐つて密と良人の氣配を窺ふ、二階八疊の間、明るい電燈の下に膝を落して、芳夫は頻りに考へ込む、他處目にも知れる心の苦惱を、己れ一人の胸の底にたゝむで、強ひて押隠すやうにも見做されるので、眞喜子はそれが氣になつて耐らない。

「お金でせう、貴郎！」と重ねて促したけれども、芳夫は黙つてゐた。

膝の前には電報が伏てある、見たところで眞喜子には判るまいが、この場合一寸見たいとも思つた、手を出さうとして急に氣を變て、眞喜子は再び良人を窺ふ。

少時すると徐ろに口を開いて「至急に金が要るとき、大山の極文句だ！」と投げるやうに言ふ。

「然うでせう、大山さんの電報なら金よ、何うでも拵へなくちやならないのね」

「唯、金を送つて濟むだけなら好いが、これを御覽」

指の先で突出された電報を取ると、眞喜子は急いで讀始めた、五枚の用紙に書き連ねた文字の中には、眞喜子の肺に落ぬ事柄もあつた、大體は千圓ほど直ぐ送れの意味だ。

「本牧の債権者が八釜しいとは……何でせう是は？」

「會社で一時借入れた金さ」

「貴郎、知つてゐらしたつて」

「それは知つてゐる、私が立會の上で借た金だ、その外に二千圓の手形があるだらう、その分は全然私の知らん金だ」

「まア！」と呆れて「貴郎の知らないお金つて……勝手に大山さんが借たのでせうか」

「然うだらう、併し名義が會社になつて居れば、矢張り責任は免れん、大山を法律に訴へたところで、支拂ふべきものは私の義務に屬する」

恚う言つて芳夫は首を垂れた。

眞喜子は焦々しながら、

「でも貴郎、全然貴郎は知らないのですもの、勝手に大山さんが借たのだから、責任も義務も大山さんに有らうちやありませんか」

「然うはゆかんよ」

「捨て、置いたら何うなるでせう」

今度は芳夫が呆れたやうに、熟と眞喜子を見てゐたが「捨て、置けば破産するだけの事さ」

眞喜子はもう胸が一杯になつた。

父の病氣、目前に迫つた金の難儀、搗て加へて手形の難關が現はれる、一方には

債権者の厳しい催促がある、四方八方に容易ならぬ問題を抱へて、獨り苦慮する良人の顔を見ては、眞喜子は身を切られるほど辛く感じた、今日まで金に不自由のなかつた身には、一層金の辛さが骨身に沁るので。

密と眼を拭いて「ぢや、お金を拵へて送らなければなりませんのね」

「……千圓は是非要よ、大山に五百圓を返済さんまでも……本牧の方を何とかせん
と可かん、能るなら大山の分も返済して、彼を誠にして了ふのだが」

「拵へますわ、妾が！」

芳夫は眼を湿ませて「この際、眞喜さんに心配させては氣の毒だが……」

「否え、脊に腹は替られませんが、それに阿父様の病氣も好い方だしね、例の代木の方を……」

ガタと幽かな物音が聞えたので、眞喜子は急に口を噤んだ、足のある幽霊が歩くやうに、誰やら階段を降りた氣もする。

立つて襖を開けたが、其處には誰もなかつた、小暗い廊下を透して見て、眞喜子は再び元の座に歸る。

眼を瞑つて考へ込んでゐた芳夫は、纏て息を吐くと「眞喜さん、代々木の方はこの際見合さうぢやないか」

「え、可けないの？」

「穩かでないよ」と沈んで言ふ。

その四

政之の病氣に氣兼ねをして、伯父の五郎助にすら無心を憚かつた、況んや政之は一切無沙汰で、勝手に代々木の地所を抵當に入れることは、義理としてもこの際なす可きでない、寧ろ面を冒して、五郎助に依頼して、不足の分を夫婦が赤裸になる。

「私はこれが尋常の手段だと思ふ」と芳夫の主張。

「何方でもね、妾は覺悟してゐますもの、貴郎さへ宜ければ代々木に手を附けますわ、ぢやア一應伯父さんに相談しませうか」

「是非頼む、私は明日横濱へ出かけて、場合に依れば一晩泊る、勿論明後日の朝は歸るが、それまでに吉報を構へて置いてくれ」

その晩夫婦は枕に就いた、父の病氣、良人の苦勞、會社の前途や、伯父への相談や、種々の故障が頭腦を往來して、眞喜子はその夜まんじりともしなかつたが、翌朝芳夫を玄關に送り出すと、續いて自分も田町の家を出た。

尤もお琴には行先を言はぬ、單にお友達を訪問すると稱して、市ヶ谷から外濠の電車に乗つた、遠い本所の松坂町まで、金といふ荷の重い苦勞を抱いて……。

幸ひ五郎助がゐてすぐ案内される、伯母は五年前流行病に罹つて、冷たい王子の避病院で死んだ、濱町に内々の妾はあるが、後妻は斷じて貰はぬと稱して、いまだ

に獨身の生活をしてゐる、一人息子の五郎を米國に留學させて、家には雇ひ婆と召使ひがゐる許り。

「何うだい、阿父さんの工合は？」

席に就くか就かぬ先に、父の病狀を問はれたので、眞喜子は挨拶をする違もない、目禮しつゝ莞爾して、

「大分好い方ですわ、もう生命には別條がないのですつて」

「結構だ、生命に別條があられちや耐らん、平素餘り酒も飲まん人なのに、病氣といふ奴は誰にでも遠慮せんでの、は、は、は」と腹を揺つて笑つた。

その病氣を機會に、亡なつた伯母の噂や、留學中の五郎の消息杯を聞いて、暫く取止めのない話に耽つてゐたが、急々した五郎助は話の途切れるのを待つて、

「何か用でもあるかの」と訊いた。

「え、今日は伯父さん、折入つたお頼みがあつて伺つたのですわ」

「何だい、夫婦喧嘩の仲裁かい、其座ものなら持込んでも駄目だ」とぐらかす、
「否え！」と真喜子も笑つて「呑氣な話ぢやありません、あの、伯父さんに是非お
力になつて貰ひたいと思つて」

「ふむ、芳夫さんの會社にでも何か持上がつたのか」

真喜子にはこの言葉が盲龜に浮木だ、百萬の援兵を得たやうな心地で、隙さず會
社の有望な事と、目下の苦しい立場とを語つた、固より立入つた詳細の内幕に就て
は、真喜子も知らないから従つて言へぬ、芳夫の苦心を傍で見るのが辛いので、良
人の苦勞を頷つは妻の役目、是非千圓だけ貸て下さいと切出した。
黙つて聞いてゐた五郎助は目を上げると、

「困つたことを持込んだナ」と軽く笑つて、

「芳夫さんも學問は出来るが、未々實地の修業が足らんでの、汝には悪う聞えるか
知らんが、學問だけぢや仕事は出来るものでない！」

「何とか伯父さん、この境遇を救うて下さいな、妾が一生のお頼みですわ」

「阿母さんに話はせんわ」

「え！」と伏目になり「到底話をしたところで駄目ですもの……それに、阿父さま
が彼座工合になつて、今持込んでも聞いてくれませんわ」

「お琴さんも随分濫いでなア、は、は、併し困つた事を持込まれたものだ」

頻りに腕を拱んで考へてゐる、成功か、不成功かと片唾を呑んで、真喜子は壽命
が縮まるほど氣を揉んでゐる。

五郎助自慢の鶯が啼き出した、今日はカラリと晴れた心地の好い天氣だ。

一 新しい罪惡

「君には誠意がないのだ、最初から私を欺く意でかゝつたのだ、然らざれば道理の
ある説明を聞かう、さア語り給へ、この始末は何うです！」とテーブルを叩いて屹

となつた、辨天町の事務所の二階の、狭い社長室に眞赤な顔をして、芳夫は頻りに大山を責立てゝゐる。

殆んど常識を失ふまでにいたく激昂した芳夫に引代へて、相手の大山は極めて冷淡だ、豪も顔色も變ぬ、眼も引かぬ、絶えず嘲るやうな微笑を湛へて、例の便々たる太ッ腹を突出したが、半分程になつた敷島を棄ると、臆て徐ろに口を開いた、

「詳細は帳簿に記入してありますが、彼は既に御覽下すつた筈です、尤も濫費であつたといふ點だけは、大山謹んで謝罪しますよ、併し濫費であつて不當支出でない事は、明かにお答へが出来ます」

「濫費も不當支出も、要するに資金消耗の結果になるぢやないか」

「勿論、その點は何とも申譯がありません、たゞ私の不肖から事茲に至つたので、敢て私一人の行つた事でなくとも、責任上私から重々お詫をして置きます」

「責任を知る君ならば……責任を知る君ならば！」急ぎ込んで又卓を叩いて「何故

私に無断で手形を出した」

「それは臨機の處置に出たもので、責任上已を得んからです」愈々落着いてちろりと芳夫を見る。

「何が臨機の處置だ、火急を争ふ場合でない限り、一應電報で照會すれば好い、現在の經濟で二千圓は大金ぢやないか」

「然うですなア」

「果して君が臨機の處置に出たとしても、然らば何故私の承諾を求めなかつたか、今日まで隠してゐたとは甚だ怪しからん」

大山は態と話の向をかへて、

「では貴君の御意見を伺ひませう、兎も角も事茲に至つて見れば徒らに争うても仕方がない、まだ創立には四十餘日も間があるし、事務所負債も約六七千圓に達して居ります、今の手形と同時に如何なる手段を施しますか、是非そのお意を聞かせて

頂きませう」

「馬鹿を言ひ給へ、其處に負債があつて耐るものか」

「これだから困る！」と平氣な顔をして笑つて、

「貴君は何のために帳簿を御覽でしたか、若しお解りにならんけりや、赤井の説明をお聞きなさい、三千口の申込みの中には、借入金拂込みに當てる分もあります」

「えッ！」と芳夫は我知らず叫んだ、刎ね返つたやうに立上つたが、もうその時には眞蒼になつてゐた「借入金を……借入金を！」

「然うです、是亦已を得ず振替へる契約になつてゐます」

「それが、六千圓もあるのか」

「は、困るなア、説明するよりは帳簿が確かだから、一切文字の説明に任せて置いたのだが、お解りにならんとは甚だ心細い」

果して私曲……大山に爲て遣られたかと、芳夫はキリ、と齒を嚙むだ。

「大體は無理な仕事です、確乎な後援者も求めずに萬事獨斷で事を計らうとする、それから既に無理なのだ、兎も角もこれまで漕付けたに就ては、尋常の手段ぢや役に立たせせんせ、普通一萬圓を要する仕事なら、誰がやつても二萬以上の創立費を要します、だから過日赤井をもつて、五千圓入用の御通告をしたのも是等の負債に對する處分上必要と認められたからですよ、勿論濫費の點はあるが、悉く正當なる理由の下に支出しました、何うなさるお意ですか田澤さん……」

大山の態度は殆んど捨撥だ、すべての責任を芳夫の肩に投げて、己れは傍觀の側に立たうとするのだ、泣いても喚いても負債は負債、何處までも義務を守らねばならぬ。

芳夫は鋭く大山を睨んだまゝ、咄嗟に好い智慧も浮ばなかつた。

その二

窃かに芳夫の杞憂した如く、二千圓の手形が投出しの端緒となつて、始めて大山が假面を脱いだ、そうして罪惡に包まれた秘密の底を割ると、驚くべし更に一萬圓に近い負債を生じて、中には不渡手形すら振出してある、更に甚だしいのは、事務所の名義をもつて、曾て取引のない銀行を指定して、詐欺的手形を發行してゐる事が判つた。

勿論恚うした奥の手は大山の十八番で、所謂最後のドマの切狂言が開幕なのだ、便々たる太ッ腹を罪惡の舞臺に運んで、茲に立役者が大芝居を打つ、學校で學んだ

學理も經濟も、恚うした輩には一向に効果がない。訴へるなら御隨意にお訴へなさい、私は喜むで監獄へ行きませう、但し法律の制裁を受ける代りに、貴君は跡始末をお引受けなさいと、二萬からの責任を芳夫に被

せて、大山は平氣で空嘯いてゐる、この惡黨奴に拳を握つて、随分打懲りたい氣にもなつたが……畜生同然の男、良心の麻痺した奴、這麼惡黨を打つたところで、結局一時の憤怒を和らげるまでの事だ、寧ろ現在を救ふが肝腎だと悟つて、芳夫は深い思案に暮れた。

既に自分の手から小一萬圓出てゐる、これを全然捨てた意にしても、残る負債を誰が返済するか、主として責任者に立つた以上、假令大山は監獄へ遣つても、負債に對する義務は負はねばならぬ、しかも目前に迫つた火急、本牧からは厳しい矢の催促、況んや始めて知つた詐欺的手形の期限が、もう目の前に迫つてゐるではないか。

犇と兩手で頭を押へて、芳夫は苦惱しつゝ、面を伏せた、その横顔を冷やかに見ながら、

「兎も角お考へ置き下さい、私はこれで失禮します」

「憚う言つて大山が出て行かうとすると、芳夫は急に頭を擡げて、

「大山君！」と鋭く叫びかけた、

「はい！」扉の外に片足を出したまゝ、「まだ、何か御用があるのですか？」

「今日限り……君と絶交する」

「……………」

「勿論、改めて解雇するから……一切會社に關係はないぞ！」

くるりと向き直つて元の椅子に就くと、大山は靜かに煙草を探つて「已を得ません、如何にも解雇の宣告を受けませう、就ては田澤さん、私も明日から浪人するとなると、第一に生活の途を立ねばならぬので、それには又相當に金も要ます、この際貴君には甚だお氣の毒ですが、先日私の手で御用立た五百圓ですな、あれを是非一つ御返済して頂きたいですが……」

「悪黨ッ」と我知らず卓を叩いて叫びかけた。

「は、は、何と言はれても仕方がありません、随分忠實に働いた意だが、憚うした羽目になると却つて誤解されるものです、いや其廢事は何うでも宜しい、一つ御返済が願ひたいもので……」

芳夫は強ひて嵩ぶる感情を押へて、

「あの金は、まだ期限が來んぢやないか」

「然ういふ事を仰有られては困ります、有りもせん財布の中から、私が辛うじて都合した金ですよ、既に絶交の宣告まで受けた以上、貴君に貸して置く譯にゆかんですから」

一旦高潮に達した芳夫の感情は、忽ち冷たい下り坂に向つて、自分でも不思議なほど落ちて來た、横着な大山の顔が劃然眼に映つて、その心の底の秘密までも明かに読み得られるほど頭腦が確乎になつた。

手を伸して煙草を取ると、無意識に火を點しながら「宜しい、何とか都合しやう、

併し今直ぐと言はれても困る、二三日待ち給へ」

「承知しました、現在の状態を知つて居る私です、さう没義道にも言はれますまい、では二三日の内には是非お返しを願ひます」

ふいと横を向いた大山の腹には、この時怪しい或ものを隠してゐたのだ。

その三

日暮頃事務所を出た芳夫は、直ぐに東京へ歸らうかとも思つたが、如何にも不愉快でその氣になれぬ、辨天町を抜けて、尾上町に出で、往來の真中を無意識に歩いて來ると、

「アツ、田澤さん！」と呼懸けて、慌て、駈寄つた男がある、中古の中折帽、色の褪めた二重外套、大分踵の減つた柁下駄を突かけた、顔を見ると例の赤井だ。

頗い程ひよこ〜頭を下げて「今夜は戸部へお歸宅でございませうな、へへへ、

奥様がお留守ではハヤ、頓とお淋しうございませうで」

此奴も同じ穴の狸かと思ふと心持が悪い、けれども芳夫は何氣ない顔をして「うむ、歸る……併し飯は他處で喰ふ意だ」

「あツ、左様で、いや、偶には然うなさるがお宜しうござります、ではお歸宅になりましてもお差支へのないやうに、私が參つて支度させて置きます」

あたふた駈出して行く姿の卑しさ、冷たい眼をして見送つてゐた芳夫は、尾上町の角を左に曲つて、躰て八百政の前に立つた、曾て大山に案内せられて、二三次度登つたことのある家だ、

導かれて二階座敷に通る、茶が出る、菓子が出る、年増の女中が會釋して御用を訊く。

「飯を喰ひに來たのだが、酒を先に持つて來て貰はう」
「畏りました、では見計ひまして」

立たうとすると又呼止めて、

「二人許り藝者を呼んで呉れ、いや、誰でも好い、陰気な奴は可かん、年増でも構はんから陽気な話の面白い女に限る」

強い酒の香と女の匂ひとを以て、暫時心の苦惱を忘れんとする、一旦冷静に返つた芳夫の感情は、再び焰の如く燃え始めて、憤慨、痛恨、種々の形となつて衝いて来る。

間もなく酒が出た、口取が出た、五六種の肴を美しく配膳して、お召に應じた年増藝妓が二人、なるほど縹緞は二の町だが、口だけは關隨一の強の者と聞えた。

「先日は失禮、その後些ともお見えになりませんで、おや然う、妾の方が御無沙汰ですつて……何うぞ御最員に、お酌をさせて頂きますせう」

「この頃は忙しいかね」

「難有うございます、這麼婆アでもお引立にあづかりましてね、お蔭で何うやら佳

うやらお茶を濁して居ります、先夜大山さんにお目に懸りましたが、相變らずあの方は元氣でゐらつしやいますこと」

大山の名を聞くだけでも今では不愉快だ、例の神經的に眉を寄せて「サア一つ獻がう」

「難有う！旦那のお酌で恐れ入りますね」

「何か聞かせて呉れ、大いに面白く酔うて面白く歸るから」

「然うですね、ちや一つ、取つて置をお聴かせ申しませう、ほ、ほ、何うせ自慢する程だから、碌なものちやありませんよ」

口も達者なら撥も達者に弾く、聲は佳し、節は冴えたり、玲瓏として一曲を終れば、芳夫は尠からず氣に入つて、更に今一曲を所望した、強い酒の香と女の匂ひに蒸されて、現の如く恍惚としてゐる、

かくて時計が幾廻りしたかを知らぬ、不圖氣が付くともう十二時だ、早々に藝妓

を歸して、食事を濟せて、芳夫は心地よく八百政を出た、穩かな夜を轍の音のみ、戸部の山王山に歸つた時は、殆んど足元すら定まらぬ程に酔うて……

「お歸り遊ばせ！」と半ば抱くやうにして、辛うじて連込んだのはお民であつた。「あ、お民さんが留守をしてゐたのか」

酔うてゐても本性はあると見える。酒臭い息をフツと吐いて、醉眼にとろりとお民を見る。

文金の高島田、薄化粧した顔立の美しさ、ネルの寝衣の上から緋縮緬の扱帯を巻いて、お民は莞爾、芳夫を見て嬌羞む。

その四

是より先、芳夫と別れて宙を飛むた赤井は、例の尾上町の暴露以來、御機嫌甚だ斜なるお高を急立て、お民を湯に入れるやら化粧させるやら、山王の留守宅には自

身に出掛けて、水を汲む、火を起す、掃除をする、萬一酒とでも仰しやらうものなら、即座に目の前へ並べ得るやう、刺身、酢の物、旨煮の數々を用意して、銅壺の蓋の持上がるほど湯を沸らせ、十時頃まで待構へてゐたが、一向芳夫の歸る氣配は見えぬ。

けれども、必ず歸宅との言葉もあつたし、外泊する癖のない人だから、或は十二時過て歸宅するかも知れぬ、それまで安閑と待恍するも迷惑、と言つてお民一人に留守させるは不用心だが、目的のためには手段を選ばぬ、

寧ろ冒險的にお民を残して、二人差向ひが却つて乙だらうと、己が心に引比べて、十時を打つと早々に歸つた、緋縮緬の扱帯に艶な姿を見せたは、待草臥れて寝ましたとの謎だ。

芳夫は他愛もなくお民を見てゐたが、快く一碗の茶を喫して、再びふツと息を吐くと、火鉢の横に肱を突いて、

「大層今夜は綺麗になつてゐるねえ」
「ほ、ほ、然うですか、綺麗だと仰有つて下さると嬉しいわ」仇氣なく顔を寄せて莞爾する。

「留守中ずつと此家にゐたのかね」

「否え、今日は旦那様がお歸り遊ばしたのでね、それに若し御酒でも召し上るやうなら御不自由と思つて、宵からお待ち申して居りましたわ」

「やア、それは氣の毒だつた、折角待つてゐて呉れたのなら、最と早く歸るんだつ
け！」

むく／＼と起上つて次の間に行く、無造作に衣類を抛り出して寢衣と着替へて、
今度は行儀よく火鉢に向つたが、

「酒があるね」

「え、ありますわ、お膳も出來てゐます」

「ぢやア貰はう、湯もよく沸つてゐる、お民さんのお酌で一つ飲むかな」

お民は笑ひながら膳を運んだ「妾のお酌では、お厭でせう、奥様でなくては、ほ
ほ、」

「ナニ、結構だ、お民さんの美しい顔を見て飲む方が餘程旨い」

憤怒と、痛恨と、遺瀨なき心の苦惱とを押へて、強ひて八百政の二階に耽溺した
芳夫の頭腦は、この時既に常識を失つてゐた。

妻の留守中お民を相手にして、串戯口を利きながら、酒を飲む、強い酒と女の匂
ひに酔うて、果敢い少時間を忘れて過さうとする——大山の良心を罵つたその芳夫
が、今は却つて己れの良心を麻痺して了つた、血氣の勇を酒にあふらせて身も心も
蕩ける程に酔ふた。

「もう寢よう」盃を伏せてゆつたり手を突く、芳夫の顔は火の如く燃えてゐたが、
お民は密と膳を片寄せて、

「ではお寢床を延べてありますから……お寢み遊ばせ」

「うん、汝もお寢み……あゝ、好い心持に酔ふた……」

フラ／＼として立上がるのを、お民は慌て、介抱しつゝ、

「お浮雲うございませう」

「大丈夫！ 恠う見えても足だけは達者だからねえ、はゝゝゝ」

「然う仰有る傍から……あれ、お浮雲い」

危ふく火鉢の上に仆れ懸つたのを、芳夫は辛くも踏みこたへた、餘つた力がお民の肩を突くと、これは踰越として膝を折つた。

「アツ、私よりか汝が浮雲い」

「否え、何ともありませんわ」

醉眼に見るその顔の美しさ、濃き紅は人の胸を刺して、夜目にも強烈なる色彩を誇る、文金の高島田、燦然として眼を射る指環、況んや仇氣なく微笑む娘の、落花

春を逐うて愈々艶なるを。

芳夫は茫然として我を忘れた、何處やらの時計が二時を打つた、さら／＼と降る夜の雨は、静かに脊戸の籬を叩いて淋しい。

一金策

「汝の依頼なら何でも聞くが、今度だけは堪忍して呉れ、高が千圓や二千圓、厭で汝に貸ぬのぢやないぞ、尤も來月になれば都合もつくが、それまで何とか踏張つて見たら何うだ」

伯父の家を出た眞喜子は著しく失望してゐた、今度だけは免して呉れ、一ヶ月ほど待てとの言葉は、固より眞喜子の豫期しなかつたものだ、邪が非でも頼込んで駄を捏ねて、何うでも千圓だけ借出す目算が、さて伯父に會うて話して見ると、案外五郎助も手許不如意の模様、詳しく内情を聞かされては有繋に強ひてとも言兼ね

て悄悄松坂町の邸宅を辭した。

良人には吉報を齎らす約束がしてある、火急に迫つた必要の金を今更出來ませぬとは如何にも言悪い、失望する心持は誰も同じだと思ふと、眞喜子は居ても立つてもゐられぬ氣がする。

首垂勝ちに羊の徒歩、心なく龜澤町の交叉點に出た時、

「あ、夫人！」と呼掛けて近寄つた男は、俱に一夜を姥子の湯に明して、翌日新橋まで同行した篠原であつた「何方へお越ですか」

眞喜子も眼で笑つて「一寸伯父の家へ」

「さう／＼この邊でしたね、全然御無沙汰してゐますが、別にお變りはありませんか」

「え、相變らず達者ですわ、貴君、これからお歸途なの？」

青山行の電車が二臺續いて通る。

「今朝早く龜戸へ出掛けたのです、歸途に松坂町の親戚へ寄つて、これから上野へ廻らうと思つてゐるのですが……」言ひつゝ眞喜子の顔を穴の明く程見入つて「大層お顔の色が好くないですな、御病氣ですか」

心の苦惱が顔に出たのかと、眞喜子は耻かしさについ首垂れた「え、」

「そりや可かん、御養生なさらんと可かん、丁度今が病氣の流行する時だから……貴女電車へお乗りでせう」

「篠原さん……あのー貴君にお目に懸つたを幸ひ、少しお願ひしたいことがありますわ」

篠原は快く頷き、

「何なりと仰有つて下さい、御遠慮は要りません、何ですか？」

「は！」と言つたが、這麼往來ではと躊躇した、溺れる者は藁にも縋る、失望した矢先へ篠原に會ふた眞喜子は、或はこの男の周旋に依つて代々木の地所を抵當にし

たいとも考へた。

夫婦が赤裸になつたところで千圓には足らぬ、遅かれ早かれ都合するものなら、寧ろこの際抵當に入れやう、來月になれば伯父の方も出来るし、目前の急場を救ふ手段としては、もうこれ以外に方法はないのだ。

と突差に恚う考へたので、一應篠原に絶つて見たいと思つた、併し此處は龜澤町の交叉點だ、往來の立ち話では要領を得ない。

「入り込んだお話なら私の下宿へお越になりませんか、閑静でなかく、氣の利いた家ですが……」

「けれども、上野の方へお廻りになるのでせう」

「ナニ、是非とも行かにやならん用向はありません、先日の御馳走の返禮に、今日一つ都合させよう」

「は、は、は、では然う願へれば結構ですけれど」

折よく新宿行きの電車が停つた。

篠原の下宿は府下の柏木にある、新宿終點から凡そ四丁、鐵道線路を越えた向ふ側だ。

二人は終點で下車して甲州街道を辿つた、赤い煉瓦の浄水場が見えて来る。

「田澤さんは横濱ですか」

「え、今朝参りましたがね、多分明日は田町の方へ見えますでせうよ」

「あれッ限りお目に懸らんから、お禮旁々伺はんけりやならんのだが、未だに下宿住居の身分でね、暢氣なやうな忙しいやうな、自分でも異體の知れん生活をしてゐるので、つい存じながら御無沙汰をして居ります、併し好いところでお目に懸りました」

程なく閑静だといふその下宿に着いた。

その二

小萩が庭に和らい風を誘うて、丘にも畑にも活々とした青葉を見せた、二階の一室に眞喜子を導いて、熊と硝子戸を開放したが、晴れ渡つた郊外の空気が澄んで、自から氣も心も爽快する。

「千駄ヶ谷にゐたんぢや珍らしくもあるまいが、恚うした郊外生活は我々の生命です、假に五十年の壽命とすれば、その内五年や六年は此處の賜ですよ、第一腹が立たうと、喧嘩がしたくならうと、田舎ぢや拳の遣り場がありませんのでね、はは、」

「本統に閑静ですこと、田町の家も見晴しは好いけれど、到底此處のやうにはゆきませんわ、好い場所をお探しなすつたのね」

「夫人を前に置いて申しちや失禮だが、矢張り獨身のお底なんです、女房や子供が

あつて御覽なさい、兎角異論が出たり、用事が多かつたりして、適當な住居を選ぶ隙がない、そこへゆくと我々は暢氣なもので、握飯さへありや何處へでも駈出しますからね、要するに人間は握飯の奴隷だ、握飯のために働くのだと思へば不平も出ませんさ」

最高の學府何者ぞ、一片の卒業證書何物ぞ、肩書に何々學士と記して見たところで、米の値段に大した影響はない、親の不心得から大學へ抛り込まれて、天晴八百屋學問の中毒をして退けたと、例も口癖に罵る篠原一次。

校中隨一の暢氣者であつたが、今でも暢氣に浪人してゐる。

「早速ですが……折入つてお願ひがありました」

「然う〜」慌て、巻煙草の吸殻を捨て、

「伺ひませう、態々浪宅へお越下すつたのだ、犬馬の勞とまではゆくまいが、豚位の御盡力はしますよ」

「實は……妙な御相談でね……お話をするのもお耻かしいですけれど！」一寸句切つて伏目になる。

眞喜子は、その誇の多い娘時代に於て、會て金銭上の勞苦を嘗た事がなかつた。従つて金に關する相談なるものが、何れだけの呼吸と何れだけの苦心とを要するかを知らなかつた。

勿論進んで研究はして見ない、芳夫を良人に迎へて、會社創立に指を染めて、始めて世の中へ出る首途に當り、始めて借金なるもの、必要を感じた、同時に借金の苦しい事と意外な大事業である事とを悟つた。

今その苦しい借金に就て、再び苦しい端緒を切る「實はお金の御相談ですけれども……」

「成程！」早呑込みの篠原忽ち合點しつゝ、

「安い利子で貸たいと仰有るのですか」

「否え……妻の方が借るのですわ」

アツと驚いたやうに眼を圓くしながら、

「貴女がお借になるのですか」

「……はい」

「これは驚いた、金に不自由のない貴女が借金をする……いや、世の中が段々逆様になりかけましたね、何ういふ譯です、それは！」

茲に於てか、勢ひ金の必要に就いて、一應の説明もせねばならなく成つた、けれども、立入つた話は篠原にしたくない、この場合良人の面目も保ち度いので、五郎助に打明けた十分の一も得言はず、たゞ横濱の事業に就て、至急に金が二三千圓要る、それには代々木の地所を抵當に入れるから、是非貴君のお手で御周旋が願ひ度いと頼んだ。

「滅多な方にお話も出来ませんのでね、今日まで困つてゐましたの、貴君は御交際

もお廣いし、それにお世話をなさるのがお好だから」
 「いや、お見立に與かつて恐縮するが……然うですか、事情をお聞きすると御尤もです、宜しい、何とかしませう」
 吻と息を吐いて、

「あの、お見込がありませんか……尤も急ぐお金なのですが」
 「あります、私の親戚……と言つても兄貴の家内の實家ですがね、相應に財産があつて、内々纏つた金なら貸付る家がありますので、宜しい、今日中に當りを附けませう、ナニ、抵當が地所なら文句はありませんよ」
 眞喜子は尙くれくも頼込んで、明日返辭を聞きに来る事にして、その日は安堵しつゝ、篠原の下宿を去つた。

その三

田町に歸つた時には、母も姉も食事してゐた、もう其時分になつたのかと、時計を見ると十一時半を指してゐる、
 「只今！」と手を突いて火鉢の傍に寄ると、お琴は一寸振返つて見たが、黙つて、つさと茶漬を掻き込む、丸子は見向もせず箸を動かしてゐる。
 拍子拔がしたので、熟と見てゐたが、

「阿母さんお醫者は來て？」
 「あ、來たよ」と愛想のない返辭、
 「もう大丈夫でせうねえ、心配する程の事はないのでせう」
 一碗終つて箸を置いたお琴は、不機嫌な顔をして眞喜子を見ながら、
 「大丈夫だとも、今逝かれて耐るものかね、第一然うなつた日にや田澤家の財産が劍呑だしね」
 「……………」

「もう五年と十年と活てゐて貫はなくちや、妾達は乞食するかも知れない」

掌を返したやうに態度が變つて、如何にも毒々しい口の利き方、取つても附かぬ挨拶を聞かされて、眞喜子は餘りの事に返辭も出來ぬ。

折々横目に眞喜子を睨んで、丸子は一切不關焉なり。

「何故阿母さん、其麼ことを仰有るの、妾が一寸用達に往つたのが……それが何かお氣に觸つたのですか」

「ほ、馬鹿な……汝が何處へ何をしに往かうと、妾の知つた事ぢやあるまいしさ、氣を悪くする事もなからうぢやないか」

「でも！」もう眼を濕ませて「水臭い返辭をなさるから」

「何うしたと謂ふんだらう、この娘は！」お琴は急に笑ひ出して「汝の氣に觸る事でも妾が言つたのかへ」

「財産が何うだとか、乞食するとか！」

「まあ、厭な娘だねえ、随分汝も神經家だこと！」丸子と眼を見合せてニツとして「唯だ話をしたけさ、今阿父さんに逝れやうものなら、此家の財産が何うなるか知れない、さうなると妾達は乞食するかも知れないとね、ほ、唯それだけの話ぢやないか」

眞喜子は口惜さうにお琴を見て「何も這麼時にそれを言はなくつたつて好いわ、

芳夫が何千圓つて引出したのだから、何うとかすると當こすりを仰有るけれど、何も道樂に使つた譯ぢやなし、そのお金が一萬になつて歸るか、二萬に殖えて歸るか知れないぢやありませんか、阿母さまは只取られたやうにお思ひだけれど、それ

ぢや可哀相だわ」

「おや、大層辯護すること、阿母さんはね、只取られたとは決して思はないさ、立派に芳夫さんへ貸たのだから、期限さへ來れば返して貰ひます、又汝がそれに就て焦慮する事もなからうぢやないか」

「……………」

「男の仕事に女が口を出したり、一緒にお金の心配なんぞしなくても好いよ」

真喜子はハツと思つた、今朝伯父の家を訪れたことが、もう母の耳に入つてゐるのかと思つた。

勿論横濱の様子は誰も知らぬ筈、芳夫が火急の金に苦しんで、真喜子が必死に奔走してゐる事は、お琴も丸子も知らう道理がない、して見ると今日の伯父の話が……若しやと氣がつくと有繋に胸が躍る。

伏目になつた真喜子の横顔を睨んで、お琴は再び箸を取つた、丸子は茶碗を置いて口を拭くと、黙つて己の部屋に去つた。

肉身の母子ですら、血を分た姉妹ですら、這麼冷たい感情が湧いてゐるのかと、真喜子は沁々悲しくなつた、假令今朝のことが耳に入つたにしろ、それは田澤家に累を及ばさぬ事だ、真喜子と五郎助との直接取引で、母や姉の立入るべき問題で

ない、

然らば何の腹立で他處々々しくするのだらう、何故妾にのみ辛く當るのだらうと、我知らず首垂れつゝ涙を拭いて、真喜子は密と二階に上つた。

その四

淋しい悲しい感情が留度もなく湧いて来る、拭いても拭いても涙が零れて、真喜子は茫然と突坐つてゐた、さらぬだに小一萬の金を引出した事が、お琴の不平にもなり、真喜子の僻みともなつて、それ以來兎もすれば眼に角が立つ、血を分た姉は現代の人だと稱して、毫も同情を寄せないのみか、却つて頭から女大學だと罵つて、悪口こそ吐け頼りにはならぬ。

恚うした時に阿父さんが壯健ならと、真喜子は沁々父が戀しくなつた。泣きたいだけ泣いて涙を拭いて、密と二階から降やうとすると、

「真喜や、御飯をお喫り！」と母の聲。

黙つて顔を洗つて茶の間に入つたが、もうお琴の姿は見えなかつた、食事せぬのも悪からうと思つたので、辛うじて一碗を濟せたところへ、白い服をつけた看護婦が入つて來た。

「一寸入らして下さい」

真喜子も逢度いと思つてゐたので、看護婦の後から跟いて往つた。

桃も、櫻も、すべて青葉の翠と替た中庭、新しい疊の目に若葉の影を宿して、政之は静かに横はつてゐる、もう大丈夫と醫者に宣告されて、家族の愁眉を開かせたその病人は、今尙瘦て幽靈の如く、力のない呼吸を聞かせてゐるのだ。

枕元に坐つた真喜子の氣配を知ると、政之はバツチリ眼を開いた。

「阿父さま！」と呼懸けて摺寄つた真喜子は、人目なければ取絶りたい思ひ「大變お宜しいのですつてね、甚麼に妾喜むでゐるでせう、精々御養生なすつてね、早く

お壯健になつて下さいよ」

口をモグ／＼させて頻りに眼を瞬いた政之は、安心せいといふ風を見せて、少時すると、

「芳夫さんは……」

「え、今朝横濱へ参りました、芳夫も甚麼に心配したでせう、でもお醫者が大丈夫だと仰有つたのでね、今日は安心して行きましたわ」

「うん、うん！」と重々しく頷く、青葉隠れに鶯の啼くのが聞える。

口を嚙むで静かに見てゐると、又、

「芳夫さんの……會社の方は何うちやな？」

「はい！」と言つたが、真喜子は胸に釘を打れる思ひ、何として好くない消息を聞かされやう、更に膝を寄せて覗き込んで、

「阿父様、會社の方はね、段々株主が多くなつて、工合よく進めてゐますのだから

心配せずにおて下さいよ、芳夫もこの頃は一生懸命ですわ」

「うん、うん！」と笑顔を作つて頷き「結構ぢや、精々働かんと可かん」

會社が工合よくゆくどころか、曾て覚えぬ金の苦勞に塞れて、夫婦が赤裸になる覺悟ではないか、それを知りつゝ、殊更に嘘を言ふ、親を欺いては濟まぬと知りながら……。

「貴女！」看護婦が傍から氣を揉むで「まだお確乎でないのですから……餘り永いお話は可けません」

「え、承知しました！」と眞喜子も頷いて、

「では阿父様！横濱の方は些とも御心配なくね」

「うん！」

「妾、これで失禮します、精々御養生なすつて……それから二三日留守になるかも知れませんがね、決して御心配な事ぢやないのですから、御安心なすつて……明日

は芳夫もお見舞する筈ですわ」

「うん、宜しう言うて呉れ」

眞喜子は悄然として父の病室を出た、母も冷たい、姉も冷たい、急に肩身が狭くなつて、何處にも身體の置きどころがない。

長い廊下を突當つて、無意識に小暗い蔭を抜ける、不圖「眞喜さん」といふ聲が聞えたので思はず立止つて四方を見た、其處は丁度九子の部屋の横だ。息を殺して密と佇む。

その五

「妾は總領娘でせう、總領が相續するのは順當だわ、芳夫さんだつて籍こそ入れてあるけれど、何も相續した譯ぢやないのだから、さうく勝手に眞似も出来なからうぢやないか……それに、總領の妾に何にも相談しないで、阿父さんに勝手に談

合つてさ、随意に一萬圓も引出されて見ると、阿母さん、妾にしたつて腹が立つわ……」

「道理だよ、そりや！」

「まだそれも我慢するにしたところで、此先き何れだけ使はれるか底が知れやしない、然うなつた日には妾こそ詰らないものにされて了ふ、それとも妾なんぞ何うなつても構はないのなら、妾も今から覺悟をしてね」

「まア、那麽事があるものかね」とお琴は眼を圓くした。

母親の弱點には附入り易い、丸子は有らん限りの駄々を捏る意か、殆んどお琴には口を開さぬ程まくし立てる「高が阿母さん、四萬あるかなしの財産でせう、その中から一萬圓も引出されて御覽なさい、折角苦心して溜めた甲斐がなくなつて、この先き本統に何うなるか知れやしない、まだ養子に貰つて半歳も経たないのに、最うこの始末なんですもの、二年と三年経たうものなら、全然芳夫さんに使はれて了

ひますわ」

「妾もね、それを考へてゐるんだよ」

「唯だ考へたつて駄目ぢやありませんか、使はれないやうにするより外には、斯うした場合の豫防にはならないぢやありませんか」

お琴は圓くした眼をくるく／＼させて「何しろ阿父様が好人物だからねえ、妾も内内弱つてゐるのだが……」

「阿父さんは駄目よ」言葉尻に力を入れて「妾より眞喜さんを可愛がつて、芳夫さんにお金を出したのも、眞喜さんが可愛いからなんでせう、好人物も結構だけれども、子女の教育にも注意しなければねえ」

聞き兼ねたのか急に遮つて、

「お止しよ、聞えろと悪いよ」

丸子は調子を變へて、

「ねえ阿母さん、斯うなさいな、妾は總領だから是非相續するし……芳夫さんには貸た一萬圓を遣つて了つて、他に金の五千圓も附けてね、全然別家させるのですの、そうして一切本家に關係しないやうにして、妾の相續人の披露をしやうぢやありませんか、財産は皆な妾の名義にして、妾と阿母さんが確乎してりや、芳夫さんだつて手が出せないわ、これが一番好い方法だと思ふわ」

政之の好人物にはお琴も内々弱り切つて、既に芳夫に金を出した際も、今後は何とかせねばなるまいと考へてゐた、なほ丸子は總領娘だ、順當を言へば丸子が相續人だ、財産を此のまゝにして置いては、又々芳夫に引出されるかも知れぬ、あの氣の好い政之としては、泣付かれたら斷り得まい、底なしの手桶に水を注ぐと同様、遂には田澤家の土臺が動搖いて、母子が路頭に迷はぬとも限らぬ、所詮は丸子の名義に書きかへて、お琴と丸子とが必死になつて守る、目下の場合、外に策がない。

と考へたお琴は一も二もなく同意したが、併しこの上五千圓を出す事には、例の澁り屋の本性、絶対に反對した。

「一萬圓近くも貸たのだから、あれを棒にしたいで澤山だよ、この上五千圓を遣つて耐るもんぢやない」

「さうねえ」と丸子は恍惚して「ぢやア芳夫さんに遣つた意で、自分の好きなもので買はうか知ら」

「馬鹿だねえ」と有繫にお琴も氣を悪くして、

「汝はそれだから可けない、何ぞと言ふと買ひ度がるが、お金といふものは然う容易く出来るものぢやないよ、少しはお金の難有味を知らないと罰が當るよ」

丸子は首を縮めて舌を出す眞似した。石像の如く佇む眞喜子は、もう息すら吐けなかつた。

その六

掌返した態度も毒々しい言葉も、眞喜子の頭脳には釋然として解けた、肉身の母、血を分けた姉、金から睨み合の敵同士となる、これでも母子姉妹かと涙含まれて……。

窃と廊下を立去つたけれども、幸ひ二人の眼には入らなかつた。

居間に入るも倦い、顔を合せるも不愉快な、さればとて他人を訪問する氣にもなれぬ、再び二階に上つて枕を探つて、その日は悶々の裡に考へ暮した、下女が心配して折々来た外には、母も姉も顔を出さぬ。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

前夜まんじりともしなかつたのと、金策に奔走した疲れが出たのとで、何事も辨

まへの程熟睡したが、眼を覺した時にはもう日が射してゐた、勝手元を働く下女の足音や、茶碗や皿などを洗ふ音も聞える。寢亂れ髪を搔上げた眞喜子は、寢衣のまゝ立つて戸を開けた、颯と冷たい風が流れ込んで、目も魂も明瞭する青葉の匂ひ、都は春の面影をすて、徐々夏化粧に懸つたらしい。

見上る空には雲もない好日和だ、今日は篠原を訪うて確かめねばならぬ。衣類を改めて茶の間に来る、お琴は相變らず峻しい顔をしてゐる、怒ひ逆らへば

好くないと思つたので、眞喜子は一寸挨拶した許り、食事中黙つて箸を取つて、早々に田町の家を出た。

四谷見附で電車を乗かへて、新宿の終點を柏木へ眞直に、昨日伴はれた下宿に着くと、

「やア、お待してゐました、さア此方へ」と篠原機嫌が好い。

「お忙しいところを濟しませんのね、今日はお返辭を伺ひに参りましたわ」
「私も今朝からお待ちしてゐました、早速ですがね夫人、話だけは纏めて來ましたよ」

天にも登る心地の形容は古いが、眞喜子は限り知られぬ喜びに満された、我知らず嘔と息を吐いて、

「篠原さん、這麼嬉しい事はございせんわ、何うも難有うございました、では早速御相談が出來ませうか」

「就てはねえ、斯う申しちや甚だ失禮だが、何分貴女は御婦人の事なり、且つ御親父若くは田澤君のある以上、矢張り御兩所の内の誰方かとお取引がしたいので、これは先方の申出ですが、お差支へはありますまいね」

「芳夫でも好いのでせう」

「勿論田澤君なら結構です」

「父は大病でして……醫者に談話を禁じられてゐる程ですから」
篠原は驚いて、

「アツ、御病氣ですか、些とも知りませんが、甚麼御様子です？」

「腦充血で卒倒しましてね、ナニ、もう今では大丈夫ですが……一時は随分驚いたさうですわ……では芳夫に申しまして、明日にも此方へ差向けますやうに……」

「然うして下さい、利子や期限のところも、その節田澤君とお打合せしませう」
生れて始めて眞喜子は安心の味を知つた、急に肩も身も軽くなつて、明るい世界に出たやうな心地がした。

厚く篠原に禮を述べて、下宿を出て、再び不愉快な田町に歸つたが、まだ芳夫は來てゐなかつた。

午後になる、三時を打つ、四時を聞く、けれども芳夫は顔を出さぬ、あれ程固く約束したのに、何か間違ひでも起つたのではあるまいか、と、眞喜子は尠からず胸

を痛めた。

横濱に歸らうか、もう六時を過ぎてゐる、丁度事務所の退ける時分、途中で行違ひになるやも知れぬ、十二時までは汽車があるのだから、兎も角待つて見やうと決心した。

併し念のために下女を走らせて、芳夫に宛た電報は打したが……。

何か奥齒に物の挟つたやうな、油の中に水の交つたやうな、母子三人が火鉢を圍むで、冷たい面白味のない話をしてゐた。

十二時を過ぎても芳夫は來なかつた。

一新事實

光線の鈍い、天井の低い、陰氣な社長室の椅子に凭れて、芳夫は深い思案に沈んだ。

夢だ、然らざれば迷ひだ、否、苦惱を忘れるために飲んだ酒が、頭腦も腸も腐敗させて了つた、更に新たなる苦痛を求めて、自から煩悶すべき新事實を作つたのだ。

悪魔奴、外道奴、花に化した虫奴、邪道に陥した夜叉奴と、罵つて見ても、その悪魔が、夜叉が、花に化した虫が、嬌羞となり、笑顔となつて、絶えず目の前を往來する。

犇と兩手で頭を押へて、身慄ひしつゝ、面を伏せた。

田澤家には尠なからの義理がある、政之には引立てられた恩義がある、況んや温順玉の如き眞喜子、固より新婚の情合蜜の如く、一身を捧げて仕へてゐるではないか。

濟まぬ、濟まぬ、會すべき顔を持たぬ、一夜の失策を永久に償ふには、餘りに深い罪惡であつた、悪魔奴、外道奴、花に化した虫奴、噫、その虫を、何故愛したか。

痛恨、苦惱の血氣にあふられて、強か飲んだ上に更に飲んだ、醉眼にはお民が美しい娘に見えた。

否、美しい娘には違ひないが、その夜は別て美しく見えた、文金の高島田、燦然と輝く指環、ほんのり薄化粧の寝衣姿、紅に燃ゆる緋縮緬の扱帯が、如何に酔ふた頭腦を刺激したか、恍惚として現の如く、漂々として落行く先を知らぬ、醒て始めて我に返つた時に、芳夫は愕然として色を失つた。

噫、見るに耐へぬ、想ふに耐へぬ、忽ち全身の凍るを覺えて、遽しく山王山の家を出たが……。

悪魔奴、外道奴、花に化た虫奴、俵の上でも、事務所に着いて後も、仕事の合間悔恨の隙を狙うて、ともすれば目の前を往來する。

不意に椅子を離れて歩き出した、熟と眼を瞑つて腕を拱んだ、良人思ひの貞淑な眞喜子が、母の眼を忍び姉の氣配を盗んで、窈かに本所の伯父の家を訪ふ、紙幣の

束を風呂敷に包んで、欣然として立去る嬉しさうな顔が……芳夫は再び面を伏せた。

濟まぬ、濟まぬ、眞喜子に對してはその罪將に死に當る！

妻に苦勞をさせて、己れは浮氣をして、それで今日が濟むか、男の顔が立か……

何處からともなく芳明が現れて、頑固な、片意地な昔氣質、今にも懲戒の拳の降る

やうな氣がして、芳夫は身悶えしつゝ、齒を噛むだ。

トン／＼と扉を叩いて、軽く前に押すと白い顔が浮く、

「御面會でございます」

差出した名刺をちらと見た芳夫は、暫く横を向いて考へてゐたが「……兎も角お通し申せ」

「はい」女給仕は心得て出て行く、懸て色の黒い、薄髭の生えた、もう五十餘りとも見える男を案内して来た。

挨拶が済むと椅子を寄せた。

「私が田澤ですが……」名刺と男の顔とを見比べながら「何か会社の事に就てお越下さいましたか？」

「はい」と男は馴々しく笑ひかけ「左様でございます、實は大山さんには度々お目に懸りましたが、掛違ひまして貴君とは……はい」

「何ういふ御用向ですか」我ながら口惜いほど力のない沈んだ調子で言つた。

顔には微笑を見せてゐるけれども、男は絶えず眼を輝かせて「はい、生憎貴君には掛違ひまして……實は大山さんの御依頼に依りましてな、はい、少し許り御用立した金がございます」

芳夫は透さず「いや、大山はもう解雇しました、當社には一切關係がないですが……」

「へへ」と妙に笑つて「その、大山さんは解雇になりませうとも、私の方には一

向關係がないので、はい、先月でございましたが、是非入用だからと仰有つて、三百圓だけ一寸御用立いたしました、尤も借用主は大山さんでございますけれども、貴君が連帯にお立ちなされたので、はい」

その二

「尤も利子は少々お高うございますが、何分急を要しました事で、私の方も随分都合したやうな譯で、はい、實は、打明けて申しますと、大山さんは左程信用して居りません、言はゞ貴君の御姓名に對して、はい、御用立致しましたので……」

「私の姓名に信用があると仰有るのですか」

「左様でございます、貴君様を御信用申上げたればこそ、三百圓の金も御用立致しました、これは決してお世辭を申上げるのぢやございません」

芳夫はもう聴くに耐へなかつた、さらぬだに苦惱しつゝある矢先、耳に入るものは不愉快な言葉のみだ、目に見るものは破壊的の物件のみだ、曰く高利貸、曰く債権者、曰く何、曰く何！

恰も錐を以て突刺されたやうに、芳夫の頭腦は激しく動揺した。

トンと無意識にテーブルを叩いて「何れ調査の上御回答しませう、事實を言ふと全く私は知らんのです」

「へえ！」と澄した顔で「知らんと仰有られては甚だ困りますが……」

「いや、全く今が初耳です、いづれ大山に就て十分調査した上で、何分の御回答を致しませう」

男は軽く頷いた、金以外には何等の用件も持たぬ高利貸の癖として、長座は却つて不利益と見たのか、會釋と俱に徐々椅子を離れて、

「では、然ういふ事に願ひまして……尤も私の方には確實な證文がござりますか

ら、假令貴君が知らんと仰有つても、證文の上から見まして、はい、飽まで私の方は、貴君を借主と認めて居ります、勿論、貴君を信用した上御用立てた金ですからな……」

「甚だ失禮ですが……今日はこれでお引取下さい、後日何とか御挨拶をします！」

「承知致しました、何分宜しく……いづれ兩三日の内に又伺ひますが……」

柔和に見せかけた腹には蕨がある、手詰の談判を後日に仄かして、男はいそ／＼歸つて往つた。

それでも室外まで見送つた芳夫は、廳で再び元の椅子に就いた。

大山の罪惡、たゞ自己の欲望を満足せしめんがために、恣に資金を費消し、多額の債務を作つた彼を、會社荒しと睨むだのは既に遅かつたのだ、彼を牢獄に送つたところで、償却すべき義務は矢張り自分にある、大山には唯その惡を懲す手段として、彼の肉體を拘束する以外、今では何等の執るべき策がない。

而も彼を禁錮する事は、現在の境遇を救ふ上に於いて、毫も利益となる理由を發見することが能ぬ。

況んや自己の責任となつて債務が、悉く火急を要するではないか。

堆積した書類を見るに倦く、芳夫は飄然として事務所を出た、心のみ頻りに騒ぐけれども、扱て何をするといふ氣にもなれない、賑やかな尾上町の街を無意識に歩いて、足はいつか八百政の門を潜つた。

女中の聲を聞いて始めて氣のついた時に、芳夫は慄然として肩をすぼめたが……

「昨晩は難有うございました、さア、何うぞ此方へ……」

先に立つ女中、出迎へた女將、今更引返す勇氣もなくて、芳夫は無言のまゝ二階に通る。

茶が出る、菓子が出る、程經て酒肴を運ぶ、注文に應じて藝妓が現はれる、賑や

かに打興じて笑ひ戯れて、今日も強い酒の香と、女の匂ひと、華やかな三味線の音に日を暮した、芳夫は前日より一層甚だしく酔ふた。

灯の赤い宵の町、愚か、狂か、痴か、鈍か、朦朧たる醉眼を夜風に弄らせて、九時過といふに八百政を出た、車の梶棒は停車場を左に、野毛の阪から山王山の我家へ、悪魔、外道の面影が戀しくて……

その三

これより先、一夜の手枕を千秋の誓ひとなす緋縮緬の扱帯、文金の高島田、現に明けた空名残なく晴れて、折柄葉櫻の戦ぐも嬉しく、起きて雨戸を繰つて、振返つた時に、お民はそいろに微笑を禁じ得なかつた、戀の奴、不埒な所業、勿論疾うから覺悟の上だが……

赤くなつたり、目で笑つたり、無言の裡に無量の情緒を運んで、芳夫を送り出す

と物と息を吐いた、用のない留守居の寂しさを忘れて、獨りつくねんと考へてゐると、

「お早う！」態々勝手元の方からお高が入つて来た、キヨロ／＼座敷中を見廻して「まあ／＼何うだらう、這麼に取散して、随分汝も無性ぢやないか、旦那が出て往つたらさつさと掃除をおしな」

「今爲やうと思つてゐたところだわ、妾の氣も知らないで……」とお民は笑つてゐる。

自墮落に膝を落し、

「夫人は何時歸るつて！」

「さア！」と言つたがお民は眉を寄せて「何時歸るんですか……知らない」

「何も仰有らなかつたかへ、旦那は？」

「大變酔つてゐらしつたんですもの、何を仰有るんだか他愛がなくてね」

「その外には何も仰有らなかつたかへ」

意味あるらしい眼をお民に呉れて、お高は徐ろに煙管を探る、さつと赤くなつて俯向いたが、初戀の消息は親にも耻かしい。

「否え」

「……仰有らないの？」

「え」

瘦せた野良犬が臺所を廻つて、ござ／＼籬の下を潜つて往つた。

「阿父さんもね、口へは出して言はないけれど、種々心配してゐらつしやるのだよ、もう少し確乎してさ、先日言つた事を汝何とか一奮發しなくちや可けないよ」

「早く妾達に安心させて呉れないと！」頬を凹めて力一杯吸ひながら「第一、それぢや汝親不孝だわね」

「は、は、其麼親不孝があるものですか！」とお民は又笑つた。

お高は却つて眞面目な顔をして、

「ナニ、然うぢやないよ、事柄は何うであらうと、親に安心させるのが親孝行だよ、昨夜なんぞは汝、好い機会ぢやないか」

「……でもね」

「本統に汝は子供で可けない、いざと言ふ時には些とも役に立たないから」

その不埒な所業を親が勧める、戀のドン底に墮たお民の耳にも、有繋に母親の淺猿しい根性が響いた。

それから二時間ほど無駄話をして、尙煩さく不埒を勧めて、程なくお高が歸つて了ふと、急にお民は淋しくなつた、勝手元の跡仕舞、座敷の掃除、火鉢の灰をならすやら、解物をするやら、三時頃風呂に往つて化粧をして、夕餉の支度する内とつぶり日は暮れる。

八時前に東京から電報が着いた。

明るい電燈の下で縫物をしてゐると、聽て門口に俥の音が留る、いそ／＼立つて玄關に出迎へたお民は、今宵も芳夫が酔うてゐるのを知つた、

「あれ、お浮雲うございますよ、妾の肩に扼つて入らつしやい」

「ナニ、大丈夫だ、酔うてもまだ本性はある……」その癖疾うに本性を失うて、海月同様、べつたり突坐つたまゝ目を据ゑて「誰も訪問の客はなかつたかね？」

「はい、誰方もお見えになりませんが……」

莞爾して、

「電報が來てゐますわ」

「電報が……」

「え、……」

芳夫はごろりと横になつた、長く息を引いて眼を瞑る、封を切らずとも領かるゝ